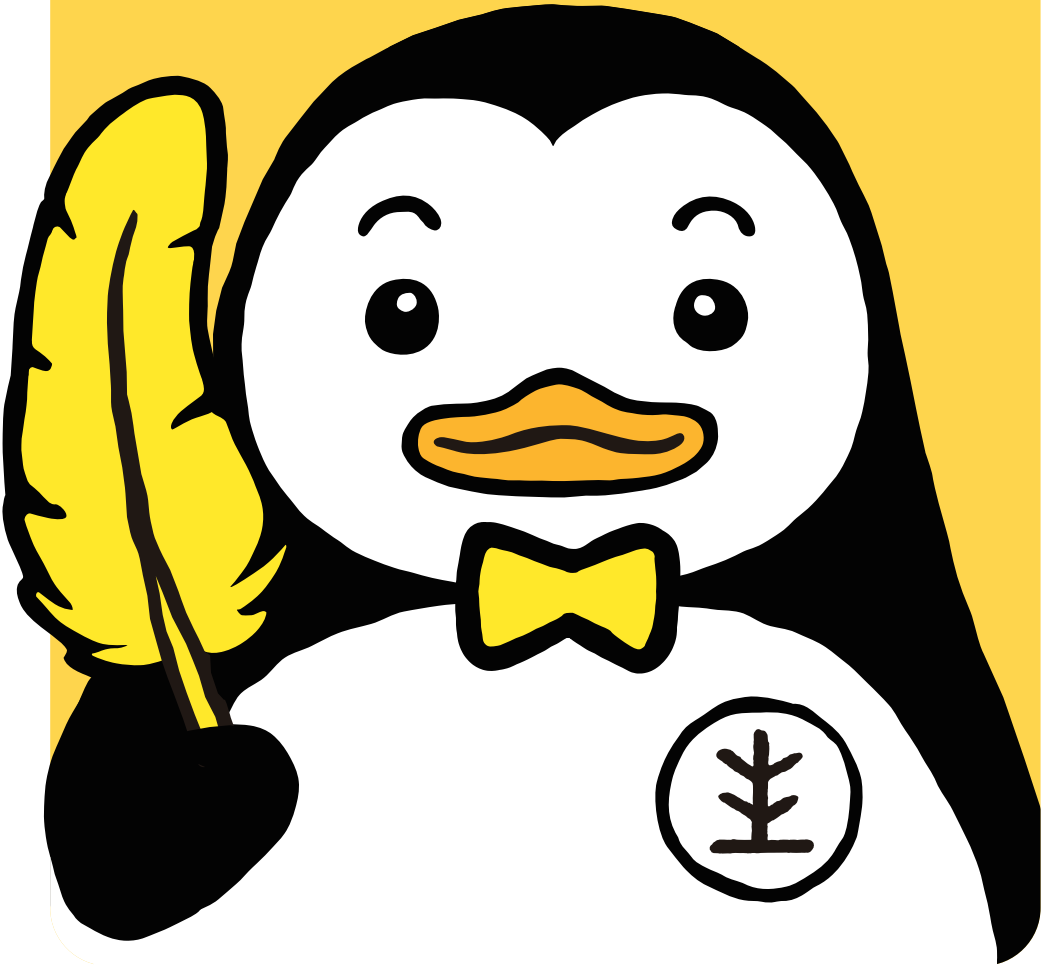
第65回“社会を明るくする運動”
作文コンテスト

主唱／法務省

入賞作文集



更生保護のマスコットキャラクター
更生ペンギンのホゴちゃん

“社会を明るくする運動”中央推進委員会
更生保護法人 立川更生保護財団

第65回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

平成27年12月25日　法務省

法務大臣賞表彰式

受賞者等記念撮影について

（前列右から）
高橋さん御家族
法務副大臣　盛山　正仁
小学生受賞者　高橋　真衣
法務大臣　岩城　光英
中学生受賞者　重岡　萌花
法務大臣政務官　田所　嘉徳
重岡さん御家族
（後列右から）
法務省保護局長　片岡　弘
全日本中学校国語教育研究協議会会長
東京都板橋区立向原中学校校長　新飯田　潤一
全国保護司連盟理事長　野沢　太三
日本更生保護女性連盟会長　千葉　景子
日本更生保護協会事務局長　柿澤　正夫
法務省秘書課長　神村　昌通
重岡さん御家族
（敬称略）

（小学生の部）愛媛県　高橋　真衣さん

（中学生の部）福岡県　重岡　萌花さん

はしがき

法務省が主唱する〝社会を明るくする運動〟は、すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない地域社会を築こうとする全国的な運動です。

その中でもこの作文コンテストは、本運動の一環として、次代を担う全国の小・中学生に、日常の家庭生活、学校生活の中で、体験したことを基に、犯罪や非行のない地域社会づくりや犯罪や非行などに関して考えたことや感じたことを作文に書くことを通じて、本運動に対する理解を深めてもらうことを目的として第四三回（平成五年）運動から始められたもので、今回で二三回となりました。

作文コンテスト応募作品は年々増加しており、今回は、全国から小学生の部一二六、九二九点、中学生の部一八一、八八九点、合計三〇八、八一八点の応募がありました。応募作品については、各都道府県推進委員会の選考を経て、中央推進委員会で審査した結果、法務大臣賞をはじめとして、小学生の部一六点、中学生の部一六点の入賞作品を決定しました。

本作文集は、この入賞作品を収録したもので、更生保護法人立川更生保護財団の御協力により制作されました。一人でも多くの人に作文を読んでいただき、児童・生徒の皆さんの思いを犯罪や非行のない地域社会づくりに役立ててもらうとともに、これから応募をされる児童・生徒の皆さんの参考になることを願っております。

終わりに、この作文コンテストの実施に当たり、御後援をいただいた全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国小学校国語教育研究会、全日本中学校国語教育研究協議会、公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会をはじめ、多大なご尽力をいただいた全国の教育委員会や学校関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

平成二八年四月

法務省
〝社会を明るくする運動〟　中央推進委員会

目次

最優秀賞（小学生・中学生）

法務大臣賞

つながり……愛媛県南宇和郡愛南町立平城小学校　六年　高橋真衣　6
明るい社会をつくるために……福岡県北九州市立霧丘中学校　一年　重岡萌花　9

優秀賞

全国連合小学校長会会長賞

愛情で幸せに……北海道札幌市立山の手小学校　六年　三野隼成　12
「自分の中にある花畑」……千葉県南房総市立千倉小学校　五年　山口朋希　14
社会を明るくする運動……兵庫県加古川市立野口北小学校　五年　平山武斗士　17

全日本中学校長会会長賞

「やめなよ。」の一声で……宮城県気仙沼市立松岩中学校　一年　西條秀都　19
一緒に帰ろう……神奈川県川崎市立金程中学校　三年　木村彩乃　22
人生は、一度きり……愛知県名古屋市立一柳中学校　三年　奥村颯　25

全国保護司連盟理事長賞（小学生の部）

つながりのある社会に……茨城県筑西市立関城東小学校　六年　根本侑真　28
「やさしさを広げる種に」……新潟県五泉市立愛宕小学校　五年　塚野みずほ　30
犯罪をなくして明るい社会に……山口県萩市立椿東小学校　六年　野稲太陽　33

全国保護司連盟理事長賞（中学生の部）

減らせ犯罪!!　心のお相撲さん……青森県八戸市立是川中学校　一年　佐々木陽菜乃　36
お節介がこの世を救う!!……神奈川県川崎市立京町中学校　二年　新城伊吹　39
あたたかい社会を目指して……京都府福知山市立桃映中学校　二年　横山あいり　41

日本更生保護女性連盟会長賞（小学生の部）

地域で守る明るい町に……岩手県盛岡市立土淵小学校　六年　山田慎人　44
ありがとうはおたがい様の心……山形県上山市立南小学校　六年　小山広華　46
地域で取り組む防犯……香川県観音寺市立一ノ谷小学校　六年　橋本華　49

日本更生保護女性連盟会長賞（中学生の部）

言葉の重み……埼玉県所沢市立安松中学校　三年　有元百花　52
おかえりといえる人に……静岡県下田市立下田中学校　三年　中村泉稀　55
許すこと、許されること……広島県私立近畿大学附属東広島中学校　二年　木内香緒　58

日本ＢＢＳ連盟会長賞（小学生の部）

「ぼくたちに出来ること」……山梨県甲府市立舞鶴小学校　六年　櫻井翔英　61
「想いのかけ橋」……広島県広島市立山本小学校　六年　森ひなた　64
地域のチカラ……大分県豊後大野市立三重第一小学校　六年　松尾清加　67

日本ＢＢＳ連盟会長賞（中学生の部）

僕を変えてくれたもの……福井県坂井市立三国中学校　二年　樋田真優　70
支えたい……広島県広島市立戸山中学校　三年　橋本萌　72
温かいご飯……長崎県大村市立西大村中学校　三年　久保樹生　75

日本更生保護協会理事長賞（小学生の部）

手をさしのべてあげられる社会……新潟県新潟市立沼垂小学校　六年　高野真実　78
地域と防犯～つながりの大切さ～……兵庫県神戸市立名谷小学校　六年　寺岡里紗　80
やさしさは、わたしから……山口県光市立岩田小学校　一年　古木智子　83

日本更生保護協会理事長賞（中学生の部）

犯罪をなくすために……宮城県多賀城市立多賀城中学校　一年　畠山宗　85
明るい社会とは何か……兵庫県高砂市立松陽中学校　二年　萬山花音　88
温かい心に触れることで……福岡県福岡市立和白丘中学校　一年　後藤駆　91

更生保護法人　立川更生保護財団について……94

第66回〝社会を明るくする運動〟
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ……95

お問い合わせ先……96

審査員

（肩書きは審査当日）

全国小学校国語教育研究会会長
東京都東村山市立大岱小学校校長
川畑庄二

全日本中学校国語教育研究協議会会長
東京都板橋区立向原中学校校長
新飯田潤一

更生保護法人
全国保護司連盟理事長
野沢太三

日本更生保護女性連盟会長
千葉景子

日本ＢＢＳ連盟会長
戸田信久

更生保護法人
日本更生保護協会理事長
奥田硕

法務省保護局長
片岡弘

小学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

つながり

愛媛県南宇和郡愛南町立平城小学校　六年　高橋（たかはし）　真衣（まい）

私は、3年生のときから社明運動の一環としてティッシュ配りをしています。初めはなぜこんなことをするのか分かりませんでしたが、講演を聞いてよく分かりました。その講演の中で、「保護司」という職業が出てきました。真っ先に、祖父の姿が浮かびました。

私の祖父は保護司です。保護司さんは、更生しようと努力している人を親のような温かい目で、そして厳しい心で暗い道から明るい道へと導き、二度と暗い道に戻さない手助けをするすばらしい仕事をしています。もし、保護司さんのような仕事がなかったら、犯罪が伝染病のように広がっていき、とてもおそろしい世の中になると思います。そのような世の中にならないようにするために努力している保護司さんは、危険も伴うこともあると思い、私は、講演に来られた保護司さんに質問しました。

「保護司の仕事をしていて、一番うれしかったことは何ですか。」

と聞くと、

「更生した人が会いに来てくれた時。」

と答えられました。私は家に帰って、祖父に同じ

質問をしてみました。すると、もう保護司を退職した祖父のところに、今でも更生した人が会いに来てくれることだと言っていました。私は、そのことを聞いたとき、人には「つながり」が必要不可欠なものだなと感じました。

先日、曾祖母と祖母の温かい会話を聞きました。

「私はだあれ。」

と祖母が聞くと、曾祖母は、

「私が世界で一番好きな人。」

と答えていました。祖母はずっと曾祖母を介護していました。祖母は、曾祖母に怒鳴られたり、曾祖母のためだけに食事を作ったりして、とても大変なことも多くありました。今は曾祖母は祖母の年齢のこともあり施設にいます。離れているけれど、とても仲良しの二人です。忙しい介護の毎日を送っていた祖母ですが、実は曾祖母に対する人一倍の愛情を注いでいたんだなと思いました。祖母と曾祖母は深いきずなでつながっているなと強く感じました。

母は、なんぐん館という施設の管理栄養士です。母がなんぐん館にいる人たちのためにそれぞれの人の食事を考えているのです。だから、母はなんぐん館にいる全ての人の名前を知っています。母は各部屋に行き、みんなに声をかけて回っていると、

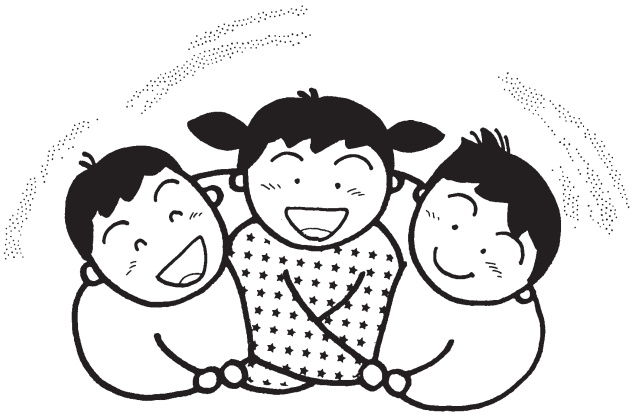
「おいしい食事をありがとう。」

と言われるそうです。母は、そう言われる度にとてもうれしいそうです。私は、このことを聞いて、母となんぐん館の人たちは食事を通してだけれど、深くつながっているなと感じました。

私は、たくさんの人が自分の家族とつながっていることに感謝しています。もちろん私も、犬のラッキーを含む家族、大好きな友達、学校や塾の先生、地域の人などたくさんの人たちとつながっています。つながっているから、今とても楽しく生活でき、幸せであり、笑顔でいられるんだと思います。

更生しようとしている人たちも私たちと同じで、人とつながっていくべきだと考えます。今の私たちにできること、それは、更生しようとしている人がいたら偏見の冷たい目で見ないで、応援してあげられるような温かい心をもつことだと思います。「温かい心」それは、人を思いやれる心、いいところを見つけようとする心、優しい言葉をかけること、進んで行動すること、一人ぼっちの子を作らないことなど、私たちの学校生活の中でもよく見られる心です。こんな心にみんながなれる日がきっとやってくるはずです。

私は、これからも社会を明るくする運動のひとつ、ティッシュ配りを続けて多くの人にこの活動を理解してもらいたいです。人には、だれでも、どんなことをした人でも、生きる権利があります。命をもつ全ての人が人として生活できる世の中になるといいなと思います。



中学生の部

法務大臣賞（最優秀賞）

明るい社会をつくるために

福岡県北九州市立霧丘中学校　一年　重岡（しげおか）　萌花（もえか）

田に囲まれたあぜ道を縫うように続く葬列の中に私はいた。不謹慎なのかもしれないが列の前の方では提灯のあかりがフワフワとしその間で幡が風に揺れているのを見ているととても美しいと思った。毎年、親せきが集まる中で、いつも優しい笑顔で迎えてくれるおいちゃんが亡くなった。今年で七十才のおいちゃんは物静かで、曽祖母の月命日にもお墓参りを欠かさない本当に優しく温かい人だった。

私は葬儀の始まる前に母から話を聞かされ声が出ないくらいに驚いた。おいちゃんは私達とは血のつながりのない他人であること。おいちゃんが三十才ぐらいの頃、曽祖母が面倒を見てあげるようになったこと。私は今まで親せきのおじさんの一人であることを疑うべくもなかった。それだけ誰よりも、皆んなに打ち解けていたのだ。

母の話は、四十年前にさかのぼった。曽祖母の家は、よそから来た人が歩いていると、誰だと、うわさになるくらい、住民も少なかった。ある日、家のそばの海岸で、何時間もじっとしていたおいちゃんに声をかけたのが曽祖母だった。おいちゃんの身体には、入れ墨があった。すぐに、深い訳

があるとわかったという。刑期を終えた日に曽祖母と出逢ったらしい。

「ひいばあちゃんは、ほっとけなかったんだって。きっと、おいちゃんの外見じゃなくて中身を見てたんだろうね。」

当時、親せきは、皆んな猛反対したが、隣に住む所を提供し、一緒に三度の食事も、とるようになった。しばらくして、仕事も見つけ休日も、畑仕事の手伝いをし、ずっと独身で曽祖母と忙しく毎日を過ごした。

「どの親せきよりも、ひいばあちゃんを大切に大切にしてくれたおいちゃんだよね。」

母の言葉に私は大きくうなずいた。

曽祖母と出逢う前のおいちゃんの人生は、どんなものだったのだろう。おいちゃんの中では、ずっとなにかに苦しめられていたのかもしれない。それを、大きな心で優しく包んであげた曽祖母は、本当にすごい人だ。私は母の話を聞きながら、涙が止まらなかった。

「心の腐った人なんか、おらんよ。心が傷ついたり、弱ったり、壊れかけた人はおるよ。その人を助けられるんは、やっぱり人なんよ。」

反対する親せきを説得した曽祖母の言葉だそうだ。

私も中学生になって、新しい友人や、先輩、先生と、人間関係も、小学生の頃とは、比べものにならないくらい込み入ったものになった。とまどいながらも、前向きに頑張っているつもりだ。しかし、私は、周りの友人達のことをちゃんと見ていたのだろうか。曽祖母のように人の痛みのわかる人間になれているのだろうか。人は、何かにつまずいて、間違った道へ進んでしまうと、一人で方向転換することは思うよりもずっと大変なんだろう。だが、その時に、誰かが、声をかけ、手をさしのべてくれることで、自分の弱さを自覚して、克服できる勇気を持てるのだと、おいちゃんの人生から、知ることができた気がする。犯罪や非行が無くならないのは、再犯率の多さにもある

と思う。過ちを犯したことは許されることではない。しかし、罪を償った後、そこで立ち止まらせている私たちの責任はないのだろうか。心底、過ちを悔い、更生を願う人が生きていける社会をつくることが私達の平和な社会へとつながるのだと思う。私の周りの社会は、とても小さなものだ。しかし、たった一言、声をかけたり、笑顔を向けたりできれば、小さな偶然が、人をつなぐのだと思う。私達が明るい社会をつくり、次世代への架け橋となりたいと心からそう思う。

おいちゃんの人生は、幸福に終えられたんだろうか。その答えは、おいちゃんの遺品の中の手紙にあった。曽祖母への感謝の言葉であふれていたのだ。

おいちゃんは、幸福でしたよね。そう感じることができたので、私はこの葬列のあかりが、穏やかなおいちゃんの心のようにとても美しく思えたのだと思う。

小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

愛情で幸せに

北海道札幌市立山の手小学校　六年　三野（みの）　隼成（じゅんせい）

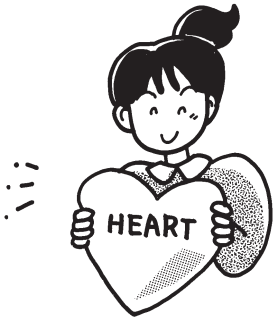
日本では様々な人が犯罪を犯します。その中で子供が非行に走ることもあります。僕はそれが不思議です。なぜなら僕は学校生活を楽しみ、家でも親に守られて楽しく安心して過ごしているので犯罪を起こす理由が考えられないからです。ではなぜ、子供達が非行に走るのでしょうか。それには色々な理由があると思います。例えば、貧困や親の愛情不足などの家庭問題や、本人の性格や障害などがあると思います。中でも子供の頃に周りからもらった愛情の量が深く関わっていると思います。なぜなら、僕はこんな経験をしたからです。

かつて、同級生に暴力をふるってしまう子がいました。でも、普段「悪い子」というレッテルが貼られているその子は、障害を持った妹にとても優しく接してくれました。きっと本当は優しいのだと思いました。ではなぜ暴力をふるってしまうのでしょうか。僕は、親からよくたたかれることや、夜家に親がいないことを聞いていました。もしそれが本当だとしたら、さびしかったと思うし、ストレスもたまると思います。さびしくてかまってもらいたいから暴力をふるって目立とうとしていたのかもしれませんし、ストレスを発散さ

せるために暴力をふるっていたかもしれません。でもその子の気持ちは誰にも分かりませんでした。先生が一生けん命その子に手をさしのべても、その子は背を向けているように見えました。きっと学校、教室も安らげる居場所ではなかったと思います。

では、別の居場所をつくるという考えはどうでしょうか。それは家でも学校でもなく、親の代わりに愛情を注いでくれる居場所です。僕の妹は障害を持っています。妹は、幼児期から国からの援助で楽しくデイサービスに通っていました。今では放課後デイサービスに通っています。そこは福祉の知識を身に付けた人が、ボランティアの人と共に一人一人にあわせた指導と、愛情をたっぷり注いでくれる場所です。妹はデイサービスが大好きで、第二の居場所があることは素晴らしいと思います。だから、障害をもっていない子でも、居場所がない子はそのデイサービスのように愛情を注いでくれる場所があれば、さびしさの裏返しとして非行に走る子も減ると思います。

そして、もし僕が充分に愛情を注いでもらえなかったら、さびしかったり、「甘えられない」というストレスから心が荒れてしまい、非行に走ってしまっていたかもしれません。大人でも、周りからの愛情、はげましがなければ、「頑張ろう」という気持ちは持てません。だから、犯罪、非行を減らしたり、犯罪をしてしまった人を立ち直らせるには、まず愛情でその人の心をいやしてあげることが必要だと思います。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

「自分の中にある花畑」

千葉県南房総市立千倉小学校　五年　山口（やまぐち）　朋希（ともき）

ぼくが小学校三年の時でした。朝食を食べていたある日、テレビのニュースで、ぎゃく待という話が流れてきた。「ぎゃく待って何？」と、お母さんに聞いてみたら「むごいことをするの。お腹がすいている子どもに食事を与えなかったり、暴力をふるったりすることよ。」と、言われた。その言葉を聞いて、一気に食欲がなくなった。それと同時に、お腹の中からフツフツと怒りがこみあげてきた。「お母さん、どうしてぎゃく待なんてするの？ぼくには全く理解できない。」というと、「しつけとぎゃく待の境目は難しいから、この機会によく考えてみるといいわね。」と言われた。

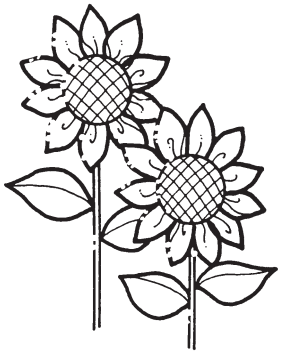
ぼくは小学一年と二年の夏、おばさん（お母さんの妹）夫婦とおばあちゃんと、山梨県北杜市にあるひまわり畑を見に行った。お父さんは仕事が忙しく、お母さんは妊娠中で、お腹が苦しいから、と一緒に行けなかった。ぼくはせめて今年くらいは…と思っていたのに「赤ちゃんがまだ小さいから、朋希だけでも楽しんできてね。」と言われ、かなり不満だった。でも、ひまわり畑を見たら、そんな気持ちは全部忘れてしまうくらいきれいだった。きれいの一言では言い表しきれないくらい

きれいだった。帰宅して、お母さんにひまわり畑の話をしてあげると「よかったわね。きっとこれから先、そのひまわり畑は朋希の力になってくれるわよ。」と言われその時はぼくの力になるってどういうことだろう?と不思議に思った。

お母さんが弟を生んでから、ぼくの生活は一変した。いつも、ぼくのことを優先してくれていたお母さんは弟の世話で忙しく、ぼくは後回しされることが多くなった。それでも弟が赤ちゃんの頃はまだよかった。ぼくも弟の世話をして、お母さんの力になっているという喜びがあったからだ。でも、弟が歩いて話し始めるようになるとケンカをすることが多くなった。ぼくはできるだけ弟に優しく接したいと思っている。でも、宿題のプリントに落書きされたり、大切にしている本を放り投げたり、いたずらというより、意地悪にしか感じられない。だから優しい気持ちになれないことが多い。そんなある日。ピアノのレッスン中、弟がいたずらにけんばんをひいてじゃまをしてくるので、やめて!と注意した。でも、何度もじゃまされ、イライラしてたたいてしまった。一度たたくと、それだけでは足りなくて何度も何度もたたいてしまった。手が赤くなり、心も痛くなった。もしかしたら、ぎゃく待をしてしまう人もこんな気持ちなのだろうか?そう思ったら泣きたくなった。お母さんに打ち明けると「ありがとうね。朋希はお兄ちゃんとしていつも色々頑張って考えてくれているのよね。」と抱きしめてくれた。ぼくの心が少しだけ軽くなった。ぼくは「お母さんはたたきたいという気持ちになった時どうしているの?」と聞いてみた。お母さんは「とりあえずひとりになって、白間津のお花畑を思い出すようにしているの。そうすると、気持ちが落ち着いてくるの」と言った。ぼくの住んでいる白間津では二月頃から花畑が広がり、花摘みの観光客もいっぱい来る。色鮮やかなストックや金魚草が広がる花畑はとてもきれいだ。それから、お母さんは「妊娠中に見た白間津の花畑がすごくきれいで、すご

く幸せな気持ちになったの。だから、心が苦しくなった時、あの花畑を思い出すようにしているのよ。」とも話してくれた。その時、ぼくの中で北杜市で見たひまわり畑が思い浮かんだ。辺り一面に広がる黄色のじゅうたん。とてもきれいで、とても幸せな気持ちになった。そうか、ぼくも弟をたたきたくなった時、ひまわり畑を思い出せばいいんだ。あの時、お母さんが、ぼくの力になってくれるといった意味がようやくわかったよ。

残念ながら、世の中にぎゃく待をしてしまう人はいる。だって子どものぼくですら、イライラが止められないで小さな弟をたたいてしまうのだから、大人になったらもっとイライラすることが増え、ぎゃく待も増えてしまうかもしれない。でも、それは絶対ダメな事。たたいたらたたいた分だけ心が傷つくのだ。ぼくもそうだった。もし、たたきたくなったら、自分の中にある花畑を思い出してほしい。大きな花畑でなくてもいい。テレビや本や空想の中の花畑でもいい。思い出すことによって、心は落ち着くはず。もちろん、それだけでイライラが全部消えるわけではないけど心にゆとりができるはず。そのゆとりが増えてくれれば、必要以上にたたくことは減らせると思う。それから、近くに苦しい気持ちを抱えている人がいたら、話をきいてあげてほしい。ぼくはお母さんに話をきいてもらうと、それだけですごく心が軽くなるのだ。どんな人に対しても優しい気持ちを忘れず、自分の中にある花畑を持ち続ければ、明るい社会になっていくと信じている。



小学生の部

全国連合小学校長会会長賞（優秀賞）

社会を明るくする運動

兵庫県加古川市立野口北小学校　五年　平山（ひらやま）　武斗士（たけとし）

ぼくは、四年生の夏休みに、神戸地方さい判所へ行き、一つのさい判を見学しました。法廷には、検察官、犯人を弁護する弁護士、そして、どう回りには縄をつけられた犯人が、けい察官に連れられて、入廷しました。さい判書記官が現れ、最後にさい判官が入廷しました。検察官が、起そ状を読み上げました。犯人の容ぎはせっ盗罪でした。空ふくを満たすため、迷いなくスーパーへ入店して、おす司のセットに飲み物、メロンなど4点を盗んで、スーパーを出る時につかまえられました。この罪に対して、犯人は「間ちがいありません。」とみとめました。

起そ状によると、この人はトラックの運転手をしていた時に、自ら事故を起こし顔が変形し入院をし、前科があり服役をしていました。服役後、仕事の面接を受けるのですが変形した顔をいやがられ、気持ち悪がられ、職にもつけず、実家へもどりますが、追い出され，ある食堂で、わずかなお金を出して食事をしていると、お店の人が、「元気がないけど、どうしたの。」と、声をかけました。今まで苦しかった出来事を吐き出しました。いっしょに泣いてくれました。行き場のないこの

人が安定して生きていけるまで、「つけでいいから、食べにおいで。」と、久しぶりに人の温かい心にふれて、もう一度人生をやり直す勇気が出て、しゅう職活動をがんばりました。しかし、職につけず食堂のつけばかり増えていって、申しわけなくなり、自分を追いつめて食べに行けなくなり、空腹に負けてしまい、万引きをしてしまったのです。

判決は、後日出ましたが、さい判が終わった時、検察官から「服役後は、心からたよれる人を見つけたり、社会は広いですので、あなたの外見だけで判断せず、内面の良さを分かってくれる人はたくさんいます。今回のことを深く反省してください。」と、温かい言葉を、かけられていました。検察官も弁護士もさい判官も、犯人の深く負った心のきずを、やさしく包みこむように、接していました。ぼくは、このさい判の様子を見ていて、法廷にいる職務の人たちの温かな心にふれて、感動しました。人は自分自身と比べたりした時に、その人のマイナス面を見つけて、いやなことを言ったり、攻げきしたりいじめたり、ひどいことをしているのに、それをおもしろがって、自分の心をどんどんよごして、いけないことに気付けない人は悪い道から出口を見つけられずに生きます。このさい判で教わった、心正しい道をぼくは忘れず、困っている人や一人ぼっちでいる人に、やさしく接して寄りそいつながっていきたいと思いました。そして、心のとがった考え方をする人は、一つ一つとげをぬいていき、角のない丸い心にみちびいてあげられたらと思います。一人一人が人を大切にし、豊かな心が増えれば、だれもがくらしやすい明るい社会になると思います。そしてぼく一人からでも始められる、あいさつや、笑顔で人に接すること、人を助けることから、社会を明るくする運動をしていきたいと思います。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

「やめなよ。」の一声で

宮城県気仙沼市立松岩中学校　一年　西條（さいじょう）　秀都（しゅうと）

「社会を明るくする」――僕は、その言葉を聞いても、正直どんな感じか分からなかった。「社会を明るくする運動」って、どんなことをすればよいのだろう……。僕の頭には、そんな思いがよぎっていた。

僕は夏休みに入り、親が毎日仕事のため、家で一人で過ごすことが多くなった。朝、テレビをつけると、また、犯罪の報道が流れてくる。毎日、事件の報道が絶えないのが、今の社会では当たり前になってしまっている。そんな世の中は、やはりおかしいと思う。なぜ、毎日のように、犯罪のニュースを見るようになってしまっているのか。「仕方ない」や「当たり前」で済ませてはいけないと、僕は思う。そんなニュースの中には、僕と同じくらいの年齢の人が関わっているものも多い。今や、小中学生の年代も、重大な事件を引き起こす対象となってしまっているのだ。そんな社会を、放っておくわけにはいかない。しかし、今すぐ、僕がこの社会を「変える」ことはできない。一体、どうすればよいのだろうか……。

僕は一年前、小学六年生の時、図工の時間に、何度か嫌な思いをしたことがある。僕が描いた絵

が、急になくなってしまっていたのだ。しかも、それが二度もあった。完成間近だった僕の絵が、急になくなるなんて……。一時は学校内の大騒動となり、先生方、友達みんなで、校舎を探して回った。探してくれた先生方や友達にはとても感謝しているが、結局その絵は、見つかることはなかった。二度目の捜索を終えた先生が、僕にこう言った。

「もし、またこんなことがあったら、今度は警察ものだからね。」

「……。」

僕はその時、黙りこんでしまった。自分が悪いわけではないのに、なぜか、ショックだったのだ。もしこれが、誰かが意図的にやっていたのなら……と思い、校内の騒動が、警察にも関わる事件になってしまうということが、同時に怖くもあった。「警察もの」という言葉の意味に、何とも言えないショックと恐怖を、僕は隠すことができなかった……。

幸い、三度目の騒動は起こらず、「警察もの」にまではならずに済んだ。しかし、もし警察に伝わっていたら、どうなっていたことか。そう考えると、僕にはまたあの恐怖が蘇ってくる。きっと、「事件」として扱われていたのではないか。そして、もっと大きな騒動を、招いていたのではないか……。そう考えると、ニュースになるような大きな事件の始まりは、あの時のような小さな騒動なのではないかと、僕は思った。少しの油断や、小さな企みが火種となり、それに、「もう少しくらい大丈夫」、「あと一回くらいならなんとかなる」という、心の隙が火をつけ、その火がだんだん大きくなって、やがて大きな炎、つまり大事件を引き起こしてしまうのかもしれない。そうやって、罪を犯してしまう人も、大勢いるのではないだろうか。

犯罪に走ってしまう人の心理は、僕には分からない。しかし、一つだけ、言えるとすれば、大きな罪のもとは、小さなゆがみや乱れにあるのでは

ないかということだ。それがエスカレートし、「物を盗む」、「不正な商売をする」、そして、「人の命を奪う」といった行為として表れてしまうのではないか、と僕は考えた。もしも、少しの心の乱れがなかったら、少しの心のゆがみをおさえられたら、大きな罪を一生背負うことも、なかっただろう。何かを盗んでから、誰かを殺してから後悔するより、その前に、自分できちんと歯止めをかけることができたなら、人生を何倍も豊かに、生きることができるのにと、僕は、最近のニュースを見て思った。

しかし、犯してしまった罪は元には戻せない。でも、いや、だからこそ、かつて犯罪をしてしまった人にはやるべきことがある。それは、「過去」の償いより、「未来」の歩みを進めることだ。過去に戻そうとするより、その先の未来に向かって、自分に歯止めをかける、強く固い意志を持って進んでいくことが大切だ。

「明るい社会」が、犯罪のない社会なら、「社会を明るくする」とは、そんな社会をつくることだと思う。中学生の僕には、すぐにこの世から犯罪を消すことは不可能だ。しかし、その小さな火種を消すことは、できるかもしれない。「やめなよ。」の一声で、大きないじめにつながるちょっとした悪口やけんかを止められるかもしれない。本当にちっぽけな一声だが、それがあるだけでいじめが消える。世界中の一人一人の「やめなよ。」があれば、世界中の犯罪の火種が消え、やがて、この世から犯罪そのものが消える日がくるかもしれない。そのために、僕はまず、「やめなよ。」が言える勇気を持とうと思う。これが僕のちっぽけな、「社会を明るくする運動」だ。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

一緒に帰ろう

神奈川県川崎市立金程中学校　三年　木村（きむら）　彩乃（あやの）

〝生まれた時から悪い人間なんていない。誰かがその人を悪くした。〟と私は思います。たとえそれが直接関わっていないとしても、それは言えることです。誰かの行動で、言葉で、その場の雰囲気で、人は弱くなり、傷つき、心を少しずつ閉ざし、闇を作っていきます。その闇が犯罪や非行をすることへつながるのではないでしょうか。

私もその闇を作ったことがあるうちの一人です。それは、小学校高学年の頃でした。私の当たり前の生活はある日を境に当たり前ではなくなったのです。

「一緒に帰ろう。」といつも隣のクラスの彼女は私のクラスまで来て、私ともう一人の友達を呼びに来ます。でも、その日は違ったのです。「〇〇帰ろう。」と彼女はもう一人の友達の名前だけを呼んだのです。私なんてまるで存在していないかのように。それから毎日その行為は続きました。私は仲間外れにされたことよりも、信じていた大好きだった友達に裏切られたということが何よりも悲しかったのです。そして、その行為はだんだんエスカレートしていきました。彼女は、私のありもしない噂を流し始めました。私と仲良く

してる子達には私の悪口を言い、私を一人にさせようともしていました。それでも彼女はたりず、私がやったこともないようなことをあたかもやったかのように先生に話し、先生からも嫌われるように仕向けました。案の条、私は先生から呼び出されてしまいました。「違う。」と言っても大人は私を信じようとはしないのです。私は彼女の思惑通り少しずつ少しずつ一人ぼっちになっていきました。

信頼していた友達には裏切られ、大人に向けて出したSOSはいとも簡単に受け流され、私はもう何もかもが信じられなくなる程深い闇につき落とされた気分でした。何より恐ろしかったのは犯罪や非行をする人の気持ちが少し分かってしまったことです。深い闇というのはそのくらい自分を見失うものなのです。自分以外全てが敵という程心を閉ざしていくものなのです。

「一緒に帰ろう。」私を探い闇から救い出してくれたのはこの言葉でした。私が一人で帰っていることに気付いたクラスメイトの子がかけてくれたのです。その子は私の閉ざしていた心を少しずつ開けていってくれました。その時の私にとってその子は光でした。悲しい時は笑顔にしてくれ、悩みがあれば親身になって聞いてくれました。そのおかげで私の闇は消えていったのです。もし、あの時その子が声をかけてくれなければ、今も私は闇にとり残され、もしかしたら犯罪や非行をしていたかもしれない。そう思うとその子に感謝の言葉しか出てきません。

本当は犯罪や非行をしたいわけではなかった。あの時の私は、きっと苦しみを誰かに気付いてほしかった。誰かに私の傷みを一緒に感じてほしかった。と、そう思うのです。そして、きっと誰でもよくて、たった一人でもいいから、そっと手を差し伸べてほしかったのです。

もし、闇が犯罪や非行をうむのなら強い人は「そんなことで闇を作るやつがいるのが悪い。」と口を揃えて言うでしょう。しかし、それは大き

な間違いです。現に私もそう思っていたのですから。

ＴＶで犯罪をしてしまった人が「中三の時にいじめられていた。」とそう話していた時、たかが一年だけいじめられただけで、なぜそんなにも心に闇を作るのだろうと思っていました。しかし、自分も同じ立場になった時、私はそれが間違いであると気付いたのです。

いじめられると今まで見えていたはずの視野が急激に狭くなり、信じていた人も疑いたくなります。そして、気付いた時には闇の中に自分が一人ぽつんといるのです。そこにいる時、人は自分が存在する意味を探し、それが見つからないと「自分はいらない存在なのか。」と考えるようになります。「いらない存在なら何をしてもいいではないか。」と犯罪や非行をしてしまうのではないでしょうか。

誰も自分は犯罪や非行なんてしないと思っています。しかし、人は弱いです。だからこそ小さなことで傷つき、悩み、心を閉ざし闇を作ります。その闇のせいで自分を見失い、そして人は犯罪や非行をします。だから私は今闇の中で苦しんでいる人に伝えたい。〝あなたが思うよりこの世界はずっと広い。どうか、あなたの見ている小さな世界が全てだとは思わないでほしい。そして「誰も信じない。」と心を閉ざしていたら光は差さない。その闇から抜け出す鍵は他の誰でもないあなたにあるんだよ〟と。もし周りに闇の中に苦しんでいる人がいたら、そっと手を差し伸べてあげて下さい。その人を救い出すことができるかもしれません。犯罪や非行を減らせるかもしれません。

もしかしたら私達の「一緒に帰ろう。」の一言がこの世界を変えるのかもしれないのです。

中学生の部

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

人生は、一度きり

愛知県名古屋市立一柳中学校　三年　奥村（おくむら）　颯（はやと）

『非行』と『犯罪』について、これまであまり考えたことがありませんでしたが、何が違うのか、どうしたらなくすことができるのか、考えてみました。

『非行』は「人として守るべき道を外れた行い」を指しています。誰もが最初から道を外れようとしている訳ではありません。一人でも多くの仲間が非行に走らないために、僕は四つの「もつ」が必要だと考えました。

一つ目は、「良い仲間を〝もつ〟」ことです。自分が誤った道に進んでしまいそうな時、止めてくれるそんな「良い仲間」をもつことです。仲間に相談することで、自分の気持ちを相談したり、理解してもらったりでき、気持ちが楽になると思います。そして、自分自身を客観的に見ることができるようになると思います。

二つ目は、「強い意志を〝もつ〟こと」です。自分自身が強い意志をもつことで、守るべき道を外れるような誘いがあっても、断ることができます。自分がその誘いに流されるようなことがなくなるのです。また、流されてしまいそうになっている身近な友達も止めることができるのではない

かと思います。強い意志は、自分自身や周りの友達を守ることができると考えます。

三つ目は、「ノーと伝える力を〝もつ〟こと」です。強い意志をもっていても、断ることができなければいけません。例えば、自分より年上の人や力の強そうな人から、たばこや危険ドラックを勧められた時、「いりません」と断る強さが必要です。それでも、押しつけてくる場合は、そこから逃げる勇気が必要です。たばこや危険ドラックによって、自分の身体や将来を犠牲にすることはできません。だから、勇気をもって言葉で伝えたり、逃げたりすることで、「ノー」と伝えることができる自分でいなければならないと思います。

そして最後は「自分の居場所を〝もつ〟こと」です。嫌なことや辛いことがあった時、心を落ち着かせることができる場所があると自分の気持ちを整理することができます。自分の行動を振り返り、判断することで、誤った道に進むことを防げるのではないかと思います。

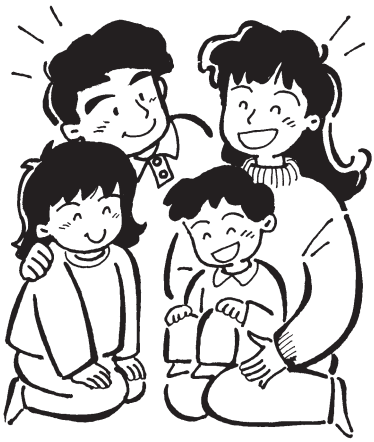
『非行』をしないためには、これらの四つをもち、強い気持ちで行動したり、客観的に自分を見たりすることが大切です。これには、「今の自分」にもできることがあります。僕たちは少しずつ大人へと近づいています。これらを理解し、実行することができたら、道を誤らず、素直に大人への道を歩き続けることができると思います。

次に『犯罪』です。『犯罪』は「世の中を乱して法律に背く行為」です。こういった行為をしないために、「周りの人への感謝の気持ちを忘れないようにすること」が大切です。家族や友達、周りの人に対する感謝の気持ちを忘れなければ、人に迷惑をかける『犯罪行為』に手を染めることはなくなると思います。それに、「大切な人たちを悲しませるようなことをしてはいけない」と自分を止められるのではないでしょうか。

また、「自分の身を守るルールを作ること」も大切です。『犯罪』に手を染めてしまう人の心情には「スリルを味わいたい」「盗んだものを売り

飛ばし、自分の利益にしよう」というものがあります。しかし、今はそれだけでなく、「ネット犯罪」というものもあり、インターネット上に写真や個人情報を流す犯罪もあります。つまり、「愉快だから」という心情もあるということです。インターネットや携帯電話など、便利なものほど危険があることを、僕たちは忘れてはいけません。これらを利用する時には、家族と相談して自分たちの身を守るルールを作ることが効果的だと思います。

僕は、『非行』や『犯罪』に手を染める人が一番悪いと思います。しかし、そういった道に流されてしまうような環境をつくってしまった周囲にも多少の責任があると思います。『非行』や『犯罪』はどんな形であれ、許されることではありませんが、その人だけの責任ではないのです。社会には、力の強い人、心の弱い人、いろんな人がいます。僕は、こういった人が共に理解しあい、支え合うことができるよう、どんな世の中をつくっていくのか、また『非行』や『犯罪』を減らすために、自分ができることは何なのかを考えられる大人になりたいです。人生は一度きり、多くの人が一度の人生をよりよく過ごしていける社会になってほしいと思います。



小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

つながりのある社会に

茨城県筑西市立関城東小学校　六年　根本（ねもと）　侑真（ゆうま）

ぼくは、今まで事件や事故に関わったことは一度もない。それはとても幸せなことだと思う。でも、テレビや新聞では、毎日のように事件や事故のニュースが流れている。ぼくは、そんなニュースを聞くと、どうしてそんなひどいことができるんだろう、この人は何を考えているんだろうと、信じられない思いがする。そして、いつもこわさを感じたり、いやな気分になったりしていた。

でも、この「社会を明るくする運動」のことをくわしく知りたくて、インターネットで調べたり、家族の話を聞いたりしてその考えが変わってきた。ぼくも社会の一員として、世の中で起きていることを自分には関係ないことと考えていてはいけないことに気づいた。そして、まずは、今まで目を向けることがなかった罪を犯す人がかかえていた事情について考えてみることにした。よく新聞を読んだり、ニュース番組を見たりしていると、罪を犯した人は、家族や友達、会社での人間関係がうまくいかず孤独を感じていたり、仕事やお金がなく生活するのがたいへんだったり、病気や障がいがあったりして、生きる喜びが感じられない人や社会の中で思ったように生きていけない

人が多いことが分かった。

そのような人たちが社会に復帰するとき、その人たちを受け入れる社会が今までと同じだったらどうなるのだろう。一度罪を犯した人は、前に罪を犯したからといって、まわりから差別を受けたり、冷たい目で見られたりすることもあるそうだ。そんな社会だったらまた同じような気持ちになり、再び罪を犯してしまうかもしれない。

ぼくの祖母は、何年も民生委員・児童委員をしている。近くで火事が起きたり、救急車が来たりすると、すぐに様子を見に行く。また、家には、一人ぐらしのお年寄りや障がいをもった人、一人親家庭の人など色々な立場の人が、色々なことを相談しに来る。そんなとき祖母は、どんなことで困っているのかよく話しを聞いて、市役所や警察などに連絡をして、どうすればいいかを聞いたり、いっしょに相談に行ったりしている。問題が解決したときには、相談しにきた人たちは、明るい顔をして帰っていく。そんな様子を見ていると、困っている人とその問題を解決できる人とをつなぐ祖母のような役割をする人も大切なんだなと思う。こんなふうに、人と人とをつないでくれる人が身近にいれば、救われる人もたくさんいるはずだ。

今のぼくには、祖母のように大きな仕事はできないけれど、何かできることはないだろうか。ぼくは、地域の人に自分からあいさつをしたり、下級生の面どうをよく見たり、外国人の友達とも仲よくしたりして、人とのつながりを広げていきたい。そして、そのつながりの中で、困っている人がいたら進んで声をかけ、どうすればいいのかをいっしょに考えたい。もし、その問題が自分たちには解決できないようなときには、先生や家の人にも話し、祖母のように人と人とをつなぐ役割も果たしていきたいと思う。ぼくも、社会の一員として、自分にできることをして、少しでも明るい社会をつくっていきたいと思う。

小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

「やさしさを広げる種に」

新潟県五泉市立愛宕小学校　五年　塚野（つかの）　みずほ

みなさんは、どんなときに「うれしい」と感じますか。わたしは、お手伝いをして「ありがとう」と言われた時や、いとこのももちゃんを保育園に送った時に、「みいちゃん、ありがとう。」と言ってもらえることがすごくうれしいです。また、はなれて住むおばあちゃんから、手紙をもらったときもうれしいです。おばあちゃんの字を見ると、おばあちゃんの顔や声が思い出されます。そして、おばあちゃんは、はなれていてもわたしのことを思っていてくれるんだなぁと感じます。

こうしたうれしさは、テストで百点をとった時のうれしさとはちょっとちがいます。テストで百点をとったときのうれしさは、思わずガッツポーズが出るようなうれしさです。自分が一人でがんばった達成感からくるうれしさかもしれません。でも、「ありがとう」の言葉やおばあちゃんの手紙からもらううれしさは、じんわり心があったかくなるようなうれしさです。そして、それは、自分以外の人がわたしにくれるうれしさです。わたしが、母やももちゃん、おばあちゃんとかかわることで味わえるうれしさなんだと思います。

そこで、わたしは、社会を明るくするにはこん

なふうに、人と人とがかかわって、おたがいの心をあたため合うことが大切なのではないかなぁと考えました。それは、初めはちっぽけなことからでもよいのです。例えば、笑顔ですがすがしくあいさつをすることでもよいのです。また、たのまれたことを気持ちよく引き受けて手伝ったり、何かを「貸して。」と言われたらよろこんで貸してあげたりすることでもよいのです。あいさつの一言が、人とかかわるきっかけになります。ちょっとした親切が相手を笑顔にします。その笑顔がうれしくて、おたがいに心があたたかくなります。そうして、かかわりが深まっていきます。

ある時、母が、わたしに「恩送り」という言葉を教えてくれました。「恩送り」とは、親切にしてもらった人が、親切にしてくれた人にではなく、別な人に親切にしてあげることだそうです。例えば、ある人が三人の人に親切にします。その三人は、また別の三人に親切にします。すると今度は九人に増えた親切にされた人達が、またそれぞれ三人ずつの人に親切にする……。こうして、親切な気持ちをどんどん次へ次へと広めていくことだそうです。もし、世の中の人がみんなそんな気持ちをもてたら、社会はとても明るくなることでしょう。

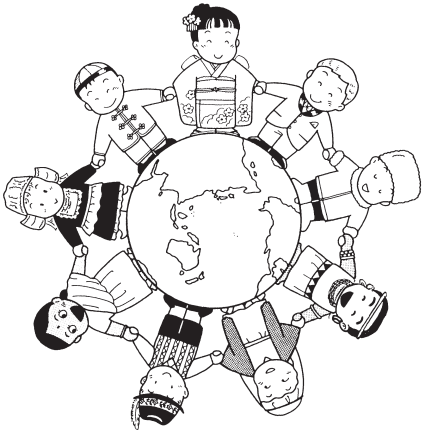
わたしには、このような経験があります。わたしは、小学校二年生の時に燕市から五泉市に転校してきました。そのとき、周りの人たちがとてもやさしくしてくれたことを今でも覚えています。今年の春、五年生に進級すると同時に、高知県から新しい友達が転校してきました。わたしは、むかえられる側からむかえる側になりました。今度はわたしが親切にする番です。わたしは、クラスはちがうけど同じ学年の友達として、できるだけその人にやさしくしようと思いました。市外から転校してきたわたしより、県外から来た彼女の方がもっと心細いと思ったからです。だからわたしは、自分からあいさつをしたり、話しかけたりして積極的にその人にかかわるように心がけまし

た。二年生の時にわたしが受け取ったやさしさのバトンを、五年生になってその友達に引きつぐことができたかなぁと思っています。

また、わたしは日ごろ、友達に拍手を送ったり、「おおっ、すごい。」といった言葉を素直に口に出したりすることを心がけています。それは、わたし自身が友達から拍手やそうした声をかけてもらってうれしかったからです。友達の拍手や声は、「自分の考えが理解してもらえたんだ。友達は、わたしのことをすごいなぁと思ってくれたんだ。」と、わたしをはげましてくれます。わたしは、初め、この拍手や声がタイミングよく出せるよう、少し意識して取り組んでいました。しかし、今ではそれが自然にできるようになってきました。小さなことかもしれませんが、こんなことからも友達からもらった「うれしさ」を、他の人に返し、広げていけるのではないかと思っています。

だれかからやさしさをもらったら、そのやさしさをまわりの人にもふりまいて、心をあたためてあげる。そんな風に人と人とがかかわったり、つながったりしていけたら、犯罪や非行はずいぶんへっていくのではないでしょうか。

世の中の人、一人ひとりがもっているやさしさが、輪のようにどんどん大きく広がっていったらいいなぁと思います。また、そのきっかけは、小さな取り組みからでも、一人でも作れると思います。わたしは、そんな大きなやさしさの花を咲かせる種になっていきたいです。



小学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

犯罪をなくして明るい社会に

山口県萩市立椿東小学校　六年　野稲（のいね）　太陽（たいよう）

「いじめも犯罪」

テレビ番組で誰かが言っていたことを思い出した。

一学期に学校でいじめについてのアンケート調査があり、ぼくは数日後、先生によばれた。ぼくの言った事やした事に傷ついている友達がいると言われた。最初はピンとこなかったけど先生から具体的に内容を聞いて、「そういえばそんな事したなあ。」というくらいの気持ちだった。でも、相手がとてもつらい気持ちだった事、これがいじめにつながると先生に言われ、そんなつもりじゃなかったので、とてもショックだった。

母も学校から話を聞いて帰り、家族で話し合った。性格や体格、育った環境など、全く同じ人は一人もいない。考える事、する事、感じ方もちがって当たり前だ。授業中でも自分と全く反対の意見をもっている人は、必ずいるし、「変わった考え方するなあ。」と思う人もいる。自分の意見をまっすぐ通すだけではなく、まわりの様子を見て、聞いて、考えてから行動する事が必要だと思った。先生に言われなければ、気づかずに同じ事をくり返したかもしれない。言ってもらってよか

った。

犯罪や非行のない地域をつくるために、一人ひとりが考え、参加するきっかけをつくること、これが社会を明るくする運動の目的だ。犯罪や非行と聞くととても大きな問題のようで、いったいぼくに何ができるのか、なやむ。ここで「いじめも犯罪」を思い出した。そうだ、とりあえず学校の中を明るくする事から取り組もう。ぼくみたいに、いじめているつもりがなくても誰かを傷つけてしまっている人がいるかもしれない。そんな人には、「相手の気持ちも考えてあげよう。」と声かけをして、気づいてもらえれば本人のためにもなって一石二鳥。

ふと、つらいのを誰にも言えないでがまんしている人もいるかもしれないと思った。でも多分分からない。どうしたらいいだろう。

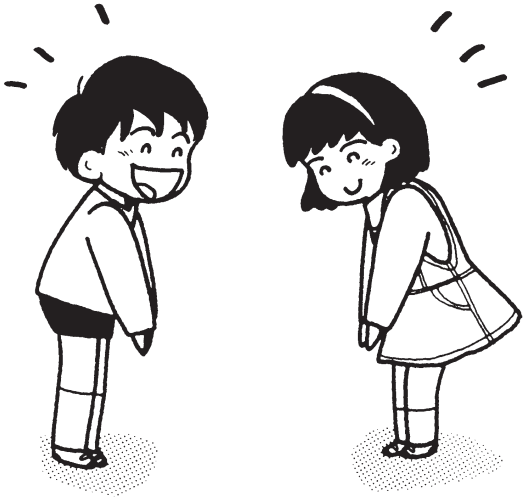
ぼくには十才年下の弟がいる。今一才七ヶ月だ。最近少しずつしゃべるようになったが、まだ何を言っているのかさっぱり分からない。もっと小さい時は、本当によく泣く未知の生物のようだった。けれど母は弟のしてほしい事がすぐに分かり、テレパシーでも使えるのかと思うくらいだった。弟も母に抱かれるとぱっと泣き止む。不思議に思って母に聞くと、母は「いつもしっかり向き合って見ているから分かる。」と言う。生まれたての頃は、何をしても泣くからいろいろ試してみた。抱っこしてほしいのか、おなかがすいたのか、おむつをかえてほしいのか…。夜中でもお構いなしに泣くのを、そのたびにしっかり抱っこして顔を見て、あやしてきた。毎日抱っこして目を見ながら笑って話しかける事を続けてきたその積み重ねで、赤ちゃんと信頼関係ができるのだ。こうして育ってきた弟は、母がそばにいると安心したように一生けんめいしゃべって何かを伝えようとしている。

「これだ。」と思った。大事な話は、本当に信頼している人にしか話せないものだ。相談にのってあげたいと思うなら、まず相手に信頼してもら

い、安心できる人にならないといけない。そのためにはどうしたらいいのか。母が弟にしていたようにしっかり目を合わせて、笑顔で話しかけてみよう。続けていくうちに、この人「今日はちょっと元気がないな。」とか、「何かいいたそうだな。」とかちょっとした変化に気づくことができるかもしれない。

そしてこの運動を学校で広めることができれば、一人ぼっちでなやむ人がへり、まず学校が明るくなる。学校が明るくなれば、学校のみんながそれぞれの地域で大人を巻きこんで声かけ運動をしていけば、地域の人も一人ではないと安心して住み続けることができ、犯罪や非行も、少しでも防ぐことができるのではないかと、ぼくは考える。

これがぼくの社会を明るくする計画だ。あとは実行しないと意味がない。勇気がいるけれど一歩前にふみ出してみよう。



中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

減らせ犯罪!!　心のお相撲さん

青森県八戸市立是川中学校　一年　佐々木（ささき）　陽菜乃（ひなの）

「あっ!!」私と母は思わず声をあげました。ショッピングセンターのおもちゃ売り場で、三・四才の男の子が売り物のバトルカードを持ち去り、一緒にきていたおばあさんのバックの中に入れる様子を見てしまいました。おばあさんはバトルカードに気づかいないまま、その男の子と出ていってしまいました。おばあさんは、自分の意思とは関係なく共犯者となってしまったのです。

自分より幼い子が万引きをしてしまうなんて思ったことも考えたことも無かったので驚きました。母も同じようで、信じられないという顔をしていました。

「お母さん、注意しに行ったほうがいいんじゃない。」

と声をかけると、

「おばあさんの気持ちを考えると追いかけて注意はできないよ。おばあさん、ショックだよ。」

そう言って、ため息をついていました。

「お店の人に話しても本人がいないとどうにもならないから。」

ということで私たちはどうすることもできずに売り場から離れました。

その後数日が過ぎましたが、これでいいのかなと、どんどん複雑な心境になっていきました。注意できなかったこと、万引きを目撃したことで嫌な思いが大きくなりました。私はきっと暗い表情をしていたのだと思います。みかねた母が、この話を幼稚園の先生に伝えると、園長先生がこんな話をしてくれました。

「陽菜乃さん、人間の心の中には必ず良いお相撲さんと悪いお相撲さんがいるんですよ。何か行動をする時に、お相撲さんが勝負するんです。おそらくその男の子は、悪いお相撲さんが勝ってしまったのですね。だから、良いお相撲さんが勝つために、皆心を強くしないといけませんよ。」

この話を聞いた瞬間、私を悩ませていた心のもやもやがすうっと晴れたのを覚えています。もともと、悪い子供なんていないのだと思ったら、なんだかほっとしました。

中学生になった今でも、心のお相撲さんのことが頭にあります。学校では、長期休みの前には生徒指導を受けます。ライン上で友人や他校生とのトラブルを起こさない。万引きは絶対にしてはいけない。水や火、車の事故から身を守る。私たちに犯罪に気をつけるようにと先生が厳しく話します。

全国的に見て、現在、未成年者の万引き、飲酒、喫煙、無免許運転による交通事故、出会い系サイトからの性犯罪などいろいろな事件を耳にするようになりました。犯罪の理由として、興味本位、友達からの誘い、お金ほしさ、ゲーム感覚などがあげられるようです。捕まらなければいい、見つからなければいい、友達とやれば楽しいからと回数を重ねる人もいるようです。犯罪という認識で行動しているように思えません。未来のある、私と同じ未成年者の事件を聞くと、悲しくなります。そして、園長先生の心の中のお相撲さんの話を思い出します。今の私の言葉に変えるなら、強い心を持って善悪の判断をしなさいということでしょう。

悪いことだとわかっていても、欲望に負けて行動してしまうと、犯罪になってしまうのです。犯罪を犯してしまえば消せない過去として残ってしまいます。本人だけでなく、家族、友人、被害者にも迷惑をかけてしまいます。嫌悪感を胸にかかえてその後の人生を歩むことを考えると、辛く苦しいことしか想像できません。

生まれたときから悪い人なんて、いないと思います。未成年者の犯罪をゼロにすることは難しいかもしれませんが、小さいときから、善悪の判断を自分でしっかりとできるように声をかけてみてはどうでしょうか。

「心のお相撲さんは大丈夫?」と。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

お節介がこの世を救う!!

神奈川県川崎市立京町中学校　二年　新城（あらしろ）　伊吹（いぶき）

うちの母は世で言う「お節介な人」だ。街で困っている人がいれば声を掛け、忘れ物を届けたり、目に余るマナー違反をする人がいれば直接注意もするし、知らない子供も叱る。一度は近所のスーパーで万引きをしようとしていた中学生位の男の子に「何してんの？レジでお金を払いなさい。見ててあげるから。」と注意をし、男の子が支払いをしお店を出るまで見届け一緒に居た僕と父をハラハラさせた事もあった。その時父は「逆ギレされて何かされたら危ないじゃないか。」と母に言っていた。確かに今回はたまたま相手が引いて何事もなく済んだが、もしかしたら何か仕返しをしてくる可能性もあるなと思った。特に、最近のニュースなどを見ていると逆恨みなどから大きな事件に発展する事もあるので、見て見ぬ振りをして自分の身を守る人が多いのだと思った。そうなると途端に母の身が心配になり始め僕も父と一緒になり「そういうのやめた方がいいよ。」と言った。母は「自分の子があんな事してたらと思うと悲しいから、いけない事はいけないと言う。」の一点張りだった。

母の考えは単純だ。

もしも自分だったら…
もしも自分の家族だったら…
もしも自分の子供だったら…
自分自身や身近な人に置き換えて考えてしまうようだ。特に見聞きした色んな出来事を僕に変換してしまう事が多いらしく、よくテレビを見ていても泣いている。その時母の頭の中ではテレビで起きている悲しい出来事が僕の身に起きている事になっているようでビックリする程うぉんうぉん泣く。母の想像の中では僕は何度も重い病気になり、事故に遇い、悲しい境遇の中で健気に生きる子供になってきた。実際の僕は健康そのもので元気なので家族は母の想像力が豊かな所に感心する反面、泣き虫な所に呆れている。

しかし想像力は大事だと思う。相手が今どんな気持ちでいるのか、自分に関係のない出来事だと思える事も自分の家族や子供、身近な人に置き換えて考えると他人事とは思えなくなるのである。遠くで起きた災害などの時ももし、自分たちだったらと思う事で募金などの協力が出来るし、街で困っている知らないお爺さんやお婆さんが自分の祖父や祖母だと思えば手を差し伸べたくなるはずだ。

みんなが想像力を働かせれば、自分の家族や子供にする様に優しく接することが出来るようになると思う。

うちの母は世でいう「お節介な人」だ。でもそんなお節介が誰かの家族や子供を助けているのかもしれないと感じる。これから犯罪や非行のない社会づくりのために自分たちができる小さなことは、どんなことでも自分に関係のない事だと最初から決め付けずまずは自分だったらと想像をはたらかせ相手の立場に立ち考え行動することだと思う。

中学生の部

全国保護司連盟理事長賞（優秀賞）

あたたかい社会を目指して

京都府福知山市立桃映中学校　二年　横山（よこやま）　あいり

犯罪や非行のない明るい社会は、誰もが思い描く理想の社会です。だから、世界中には様々なルールがあり、それを破った人には、それなりの罰が与えられるのだと私は思います。

ところで、私たちはふだん、犯罪や非行にあわれた被害者の方には、とても同情的に考えていると思います。しかし、反対に加害者の方に対しては、どのような考えを持ち、めぐらせているのでしょうか。私は、犯罪や非行というのは、それをやった本人だけではなく、そのことに気付いてあげることができなかった周りの人たちにも多少の責任があるのではないか、と考えています。また、私は犯罪や非行というのは、この現状で、世界中に張りめぐらされている、ネットワークのように、たくさんの人々が関わり合い、連なって引き起こしている、『連鎖』のようなものだと思っています。だから一人が犯罪や非行の道に走ると、それは連鎖のようにぐるぐると回って行き、悪循環になるのではないでしょうか。また、一人が犯罪や非行の道から抜けると、同じようになり、好循環になるのではないでしょうか。

このように、社会のルールを破ってしまった人

について一人一人が意識を持ち、考えることは、社会から、犯罪や非行を失くすことと同じくらい大切なことだと私は思います。私がこのように考え始めたのは、新聞に載っていた、身近にあった犯罪の記事を読んだことがきっかけでした。

昨年、福知山をおそった八月ごう雨の後のことです。被災された方たちの家や庭などの片付けを手伝うボランティアのふりをして、お金などを盗んだ人たちがいたそうです。「あの状況でお金を盗む人たちがいるなんて…。」と、言葉を失いました。私も、家族とともにボランティアに参加し、被災された方たちのお手伝いをしましたが、私のような子どもに対しても、何度も、

「ありがとうございます。」

と、丁寧に言ってくださったことを、今でも鮮明に覚えています。家や車もしん水し、心身ともに疲れ切っておられるのに、感謝の気持ちを忘れない態度に感動し、頭が下がる思いでした。そんな中で、人が人を信頼する気持ちを利用し、罪を犯すなんて、とても卑れつなことだと思いました。私は、「絶対に許せない。」と思いました。

でも、この事件について家族で話し合っているうちに、「罪を犯してしまった人は、人を思いやったり、人から思いやられたりする機会が、あまりなかったのではないか。」と考えるようになってきました。それと同時に、「この人たちは罪を犯したことによって、人から信頼されるということを、失ってしまったんだろうな。」と思いました。それは、一人の人の人生として、あまりにもかわいそうなさびしいものだと思います。

全ての事件をひとくくりにして考えることはできませんが、自分の気持ちや欲求をおさえることができずに、人を思いやることを忘れてしまうことが、犯罪や非行がなくならない社会をつくっている原因の一つのように感じます。

また、加害者の方に対する周囲の人たちのこれまでや、その後の接し方、加害者の方の気持ちに気付いてあげることができなかったりすること、

加害者の方が非行や犯罪に手を染め始めたころに周囲の誰かが気付き、「それは間ちがっていることだよ。」と、優しく教えてあげることができなかったということもまた、原因の一つではないでしょうか。

たとえ、罪を償ったとしても、その罪自体が、もともとなかったことのように消えるわけではありません。しかし、しっかりと罪を償い、自分のやったことを心から反省し、まだ残っている人生を、新しく再スタートさせ、真面目にやり直し、生き抜いていこうとしている人は、たくさんいると思います。

そういう人たちを認め、あたたかく受け入れることをできる人たちがたくさんいるということ、「もう一度、真面目に人生をやり直そう。」と思っている人たちに、「やり直しをしてよかった。」と思ってもらえることが、これからの、社会を明るくすることにつながっていくと、私は思います。そして、そういうような、みんなが暮らしやすい明るい社会がつくられ、「ずっと、このままの社会であってほしい。」と、みんなが願うような社会がつくられたらいいなあと、私自身も願っています。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

地域で守る明るい町に

岩手県盛岡市立土淵小学校　六年　山田（やまだ）　慎人（まなと）

「なぜこんなことが起きてしまったのだろう。」テレビでひどい事件が流れる度僕は心が痛む。最近テレビでは、人が亡くなるような事件がよく流れている。

僕の住む町、土淵はどうだろうか。そんな事件があったとは、聞いたことがない。地域のみなさんは、みんな笑顔で僕たちを見てくれる。その笑顔が、地域の優しさにつながっているのではないだろうか。それは、損得でない、地域でその子どもたちを守る、という考えだと僕は思う。

その考えの一つとして、スクールガードのみなさんがいる。スクールガードの方々は、僕たちの安全を守ってくれる。朝は通学路の決まった所で、安全な登校をサポートしてくださっている。車で、町中のパトロールもしてくださっている。この方々がいるおかげで、僕たちの日常は守られている。そしてさらに、スクールガードのみなさんは、僕たちにいろいろ声をかけてくださる。先日は、僕と妹が登校していると、スクールガードの方が、

「おはよう、学校は楽しいかい。」

と話しかけてくれた。僕が、

「おはようございます、学校は、とても楽しいです。」

と答えると、その方は、

「そうか、そうか。」
と笑ってくれた。僕は、何か優しい気持ちになって、学校に向かった。こんな日常だからこそ、こわいことがあったとしても、ためらわずに状況を説明することができるのだと思う。

もう一つの考えとして鍵を握っていると思うのは「あいさつ」だ。あいさつは、地域の優しさにつながっていると僕は思う。この地域には、あいさつが飛びかっている。家族、友達、地域の人、だれとでもあいさつを交わす。こうして、僕は土淵中のみなさんとつながっている。こんなにあいさつが飛びかって、土淵中のみなさんとつながれるのはなぜだろう。それは、地域みんなで楽しめる行事が多いからだと僕は思う。その中でも多くの人が集まるのが「学区民運動会」そして「神山神社相撲大会」だ。学区民運動会とは、学区内に住む沢山の人たちが集まって運動会をするのだ。ここではみんなが応援をしあう。そして、勝っても負けても、みんな笑顔で、地域の輪が広がっていく。相撲大会も、いろんな世代の方々が取り組みをしている僕たちの姿をみて拍手や歓声をあげる。たとえ負けたとしても、「いい勝負だったぞ」「よくがんばったなぁ」と励ましてくれる。こんな言葉をかけられると、負けたくやしさが消えていく。励ましてくれた人には「ありがとう」の気持ちで心がいっぱいになる。そして、会場一体が温かい雰囲気で包まれていく。

僕たちの地域は、優しさであふれている。それは、自分の損得を考えずに助けられる気持ち、お互いに楽しんだり励まし合ったりする精神から、地域全体でつくり上げているものなのだと思う。土淵という自分たちの地域を、明るくし、守っていくという意識は、この精神がある限りつながっていくと僕は思う。僕は、この土淵を守っていくという思いが、ずっと続いていって欲しいと願っている。また、僕も土淵で暮らす、一人の人間として、困っている人を助けたり、みんなで協力して楽しみ合ったりすることを続け、明るい社会を築き上げる一員となりたい。

小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

ありがとうはおたがい様の心

山形県上山市立南小学校　六年　小山（こやま）　広華（ひろか）

青と赤のサインポールが楽しそうに回っています。ちょっとお店をのぞいてみると、母とお客さんがいました。

「ただいま。」いつものように声をかけると「おかえり。」と、お店の方から母の声。母とお客さんとの楽しい会話とともに私をむかえる声が聞こえてきます。しばらくすると、「いつもありがとうございます。また、お願いします。」「いいえ、こっちこそきれいにしてくれて、ありがとうね。またよろしく。」心が温かくなるそんなひと時です。私の家では「ありがとう」がいつもひびき合っています。

私の母は床屋さんです。母は、床屋さんは天職だといっていました。お客さんのかみを切って気持ちよくしてあげることができるし、お客さんと話すことも楽しいそうです。床屋さんという仕事に生きがいを感じているといっていました。

でも、私が小さい頃、母とお客さんとの会話で、ちょっと不思議に思うことがありました。それは、母が「ありがとうございました。」というのはあたり前だけど、なぜお客さんが「ありがとう。」というのかということです。そこで知り合いのお

ばさんにそっと聞いてみました。そしたら、「確かにお母さんは、お客さんにありがとうというよね。やっぱりお金がはいるし、また来てほしいから。でも同じなんだよ、私も。お母さんからかみを切ってもらい、きれいにしてもらってうれしいんだよ。だからありがとうなんだ。おたがい様って感じだよ。そのおたがい様っていう気持ちがありがとうなんだよ。おたがいにありがとうということでおたがいの気持ちが通じ合うんだよ。」そうか、そうなんだと、その時あらためて思いました。

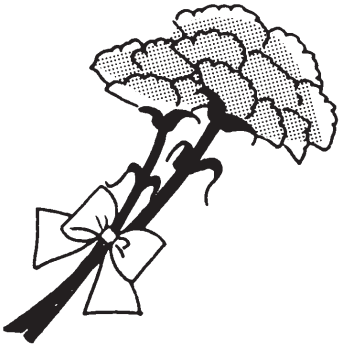
そういえば、私もこんな経験があります。友達から、この勉強がわからないから教えてといわれて、教えてあげました。そしたら「ありがとう。」といわれ、わかってくれてうれしいな、という気持ちでいっぱいになりました。私としては、そんなにたいしたことをしたとは思わなかったのですが、友達からのその一言は私の心を明るくしてくれました。何げない「ありがとう。」の一言は、おたがいの心をやさしくそして明るくしてくれます。

先日、私と同じ六年生の女の子が連れ去られるという事件がありました。また、自分の家に火をつけ、大切な家族の命をうばうという痛ましい事件もありました。人ごとだとは思えない悲しいできごとでした。どうして、そんな悲しい事件が起きるのでしょう。きっと事件を起こした人達は、自分のことしか考えていないのだと思います。おたがい様の心が失われているのだと思います。自分だけ、自分のことだけ。相手の気持ちを考えず、自分の気持ちだけで生きている。そんな悲しい心を少しでもなくし、痛ましい事件がなくなるようにできればと思います。

でも、私にできることは限られています。その一つが「ありがとう」の輪です。私の家では、仕事がら母を中心に「ありがとう」が普通にひびき合っています。私は「ありがとう」は、人を元気にし、おたがいの心をやさしくする言葉だと思い

ます。「ありがとう」はおたがい様の心の表れです。母とお客さんの姿を見ていると「ありがとう」はおたがいを気持ち良くしてくれています。みんなおたがい様なのです。そういうおたがい様の気持ちをもっていれば、人の心をきずつけたり、いやな事を平気で行うことは少なくなっていくと思います。まずは家庭の中で「ありがとう」を広げていくことです。母はこんなことを言っていました。「ありがとうは魔法の言葉。ありがとうからは、ありがとうの心が生まれるんだよ。人は一人では生きていけないからね。ありがとうはおたがい様の心だよ。」私もその通りだと思います。各家庭の中で、「ありがとう」がひびき合っていけば、そしてそれが社会全体に広がっていけば、自分の事だけを考えるのではなく関わっているみんなの事を考えるようになり、おたがいに感謝する気持ちが深まり、明るい社会を築いていけるのではないでしょうか。

悲しい事件を少しでもなくせるように、私も母を見習い、「ありがとう」の輪をもっともっと広げていきたいと思います。



小学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

地域で取り組む防犯

香川県観音寺市立一ノ谷小学校　六年　橋本（はしもと）　華（はな）

最近、新聞やテレビでは、毎日のように殺人やせっ盗などの悲しいニュースが多くなりました。どうしたら、このような悲しい出来事を世の中からなくすることができるかを考えました。つい先日も、大阪で中学一年生の男の子と女の子が殺害されるという、とても悲惨な事件がありました。中学一年生と言ったら、私とそんなに変わりません。まだまだ、したいことがいっぱいあったに違いありません。将来の夢もあったことでしょう。夜中から明け方にかけて、防犯カメラには二人の姿が映っていたことが分かった時、私は「どうして誰も二人に声をかけてあげなかったのだろう？きっと、二人に気付いていた人がいるはずだ。」と思いました。もし、観音寺市で、夜遅くに出歩いている子どもがいたら、きっと声をかけてくれたり、注意してくれたりする人がたくさんいると思います。特に、私が住んでいる一ノ谷地区では、地域の方々が子どもたちの育成に協力してくださっています。校庭にある自慢の芝生広場も地域の方々が一年中お世話をしてくださるので、私たちはいつも青々とした芝生の上で遊んだり、運動したりできます。土だけの運動場と違って、とても

気持ちいいです。また、夏休みに行われる防犯キャンプも、地域の方々が中心になって、いざという時に備えて、段ボールハウスを作ったり、避難経路を確認したり、様々なことを教えてくださいます。その他にも、里山歩き、卒業記念植樹など、地域の方々が私たちのために開さいしてくださる行事がたくさんあります。

地域の方々は、私たち子どもたちを「地域の宝」と言って、いつも見守ってくださっています。今年から始まった登下校時の安全を見守る「青色防犯パトロール隊」も、地域の方々のボランティア組織です。約六十人のボランティアの方々が、朝夕交代で青パトに乗って地域を巡回してくださっています。

一ノ谷小学校の通学路には、十一号線や高速道路の側道があります。そこを通って下校する人がたくさんいます。特に、側道を通って下校する時は昼間でも薄暗く、変質者も数回出たことがあります。放課後の陸上や水泳練習が終わって下校する時や一人で帰る時は、少し怖いです。そういう時も、青パトがいてくれると安心します。

「〇〇ちゃん、気をつけて帰りよ。」「遅くまで、頑張っとんやなぁ。」などと、気軽に声をかけてくださいます。声をかけてもらえると、安心するだけでなく、とてもうれしくなります。私が驚いたのは、何と青パトが夏休み中も暑い中、子どもたちのために地域をパトロールしてくださっていたことです。私は、学校がある時だけパトロールしているのだと思っていました。長く暑い夏休み中も、パトロールしてくださっていることを知り、ボランティアで休み中も私たちを見守ってくれているのだなぁ……と、改めて地域の方々が私たちを大事にしてくださっていることに感謝しなければいけないと思いました。

私の祖父母も、この青パトのボランティアに参加しています。いつも、私のことを心配してくれている祖父母にも感謝の気持ちを忘れずにいたいです。

最近は核家族化が進み、近所の人たちと関わりを持たないという家庭も少なくないと聞きます。放課後の遊びなど目の行き届かない部分を一ノ谷地区のように、地域の方々がフォローして子どもを育てていく地域が一カ所でも増えれば、大阪のような悲惨な事件を少しでも防ぐことができるのではないでしょうか。ボランティアの方々は、自分の時間をさいてまで活動してくださっているので、大変だと思いますが、多くの地域で青パトのような活動が活発になれば、子どもも大人も安心して暮らせる地域社会を築くことができるのではないでしょうか。地域の方々の応援に応えるために、私たちにもできること、しなければならないことがあると思います。小学生の私にできることは、地域の方々にあいさつすることだと思います。私が青パトの中から声をかけてもらってうれしいように、人と人のつながりを築くことのできる第一歩はあいさつだと思います。このようなことが犯罪防止のきっかけになるのであれば、小さな心がけだけれど実行していきたいと思います。これからも、犯罪のない明るい一ノ谷地区、明るい観音寺市であって欲しいです。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

言葉の重み

埼玉県所沢市立安松中学校　三年　有元（ありもと）　百花（ももか）

最近、思わぬ殺人事件や自殺が増えているように思う。その中には、「そんなことするような人には見えなかったのに」「まさかあの人が…」といった、思いがけない人が命の問題に関わってしまうケースも少なくない。では、なぜそのようなことが起こってしまうのだろうか。

そういった人達は、自分の気持ちを素直に吐き出せないまま、いつも周りの目を気にし、にこにこと笑う。そうしているうちに、我慢することを覚え、我慢の風船はどんどん膨らんでいく。そしていつの日か突然、割れる。「どうして気づいてあげられなかったのだろう。」そんなことを言っても、もう遅い。なぜ人はこれに気づいてあげられないのか。

その大きな原因の一つは、先入観にあると思う。「あの子は頭が良い」「あの子は優しくていい子だ」などと、その人に対するイメージは誰でも持つだろう。しかしそれを本人に言うと、お互いにそう思っていなくても、自然と押し付けになり、イメージという名の壁をつくってしまう。そして壁はその人の周りを塞ぎ、そのイメージから出れなくしてしまう。言った側は、まさかこれが

負担になっているとは思わないのだ。

私がなぜこんなことをいえるのかというと、私自身、これを体験したことがあるからだ。よくある話だが、「今回全然テスト勉強できてないや」と友達に言うと、「えー、そんなこと言って絶対してるでしょ！頭良いもんねー」と返ってくることがしばしばある。そういうとき、「事実なのに、またわかってもらえない」と思ってしまう。さらに、「百花ちゃんって何でもできて完璧だよね、羨ましい」と言われたときは、「私だって人間だから、完璧なはずないのに」と思いながらも、「私は完璧でいなくちゃならないんだ」と、心のどこかで思ってしまう。友達は、冗談や褒めたつもりで言ったのだろうが、たったそれだけの言葉でも私を傷つけるのには十分で、心に重くのしかかる。

しかし、それとは対照的に、たった一言で嬉しくなるときだってある。私は、悩みや意見をあまり人に言わない。だが、以前私が悩んでいたとき、母が気づいてくれ、「どうしたの？我慢しなくていいんだよ」という言葉をかけてくれたときは、がちがちに固まっていた私の心を溶かしてくれた。そのとき、心がとても温かくなったのを今でも覚えている。

このように、言葉はたった一言で心を温めるも、傷つけるもできる。だから、自分が普段人に投げかけている言葉を見直し、一語一語に気を付けて生活するべきだ。当たり前だと思うかもしれないが、その当たり前がいじめや犯罪を無くすための、大きな一歩なのではないだろうか。そしてまた、この機会に自分の持っていた先入観を振り払い、その人を見つめ直してみたらどうだろうか。

近くで泣いている人ももちろんだが、普段明るく振る舞っている人にこそ目を向けてほしい。もしかしたら、心の内に秘めているものがあるかもしれない。それこそ、この世から犯罪やいじめを無くすための一番の方法だと思う。「犯罪は無く

なるのか？」と問われたら、自信を持って「はい、無くなります」とは言えないかもしれない。しかし無くなることを信じて、地道に一歩ずつ歩み、輪を広げていけば無くなるのではないだろうか。多くの人が人を思いやり、犯罪のない世の中がいつか訪れるのを私は願っている。

中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

おかえりといえる人に

静岡県下田市立下田中学校　三年　中村（なかむら）　泉稀（みずき）

三年前、僕は叔父と叔母を立て続けに交通事故で亡くしました。夏休みに祖父の家に遊びに行くといつもたくさん野菜や果物、お小遣いをくれる優しい叔父と叔母でした。

しかし、叔母はバイクを運転中に大通りで衝突し亡くなり、叔父は農道から大通りに出たところをトラックと衝突し亡くなりました。

交通事故はいつも突然僕たちの幸せな生活を奪っていきます。まだまだ長生きできたのに、事故によって二人とも命を絶たれてしまうなんて、加害者の相手の事を僕たちはみな許せませんでした。

叔母のお葬式の日、車を運転していた加害者が家族に付き添われて謝りにきました。その人はまだ大学生で、僕でも知っている有名大学の学生でした。棺の前で泣きじゃくって謝っている姿を僕は複雑な思いでずっと見ていました。僕は今中学三年生で受験生です。この加害者の学生さんだってきっと大学に入るためにたくさん勉強してきたんだろうと思いました。でもこんな事故を起こしてしまい、この先どうなるのか、そんな事を考えていた時、親戚の誰かが言いました。

「まだ若い将来のある学生さんだ、許してやらなきゃな。」

例えば自分の両親や兄弟などの本当に身近な人が亡くなってしまったら、果たして僕は加害者を許すことができるだろうか。僕は絶対に許すことはできず、逆に不幸にしてやりたいと思います。でもそれでは負の連鎖になってしまうだけで、自分だって相手に対する憎しみだけで生きていかなければならないし、それはとても辛いことだと思います。すぐには無理かもしれないけど、少しずつ時間をかけて許せるようにならなければいけないことだと思います。

そして罪を犯してしまうと罪を反省し償うためにどれだけの時間を費やすことだろう。人を殺してしまったという罪はいつまでも消えることはなく、一生その罪を背負って生きていかなければならないと思います。交通事故だけでなく、犯罪の加害者やその家族をとりまく状況はとても厳しいものです。経済的にも精神的にも社会的にも追い詰められてしまいます。

「更生保護」という言葉を聞いたことがありますか。「更生保護」とは犯罪や非行をした人の立ち直りを社会の中で見守り、地域の力で変えていくという取り組みです。「更生保護」は保護司さんや協力雇用主、ＢＢＳ会などのボランティアの人達により支えられているということも初めて知りました。

罪を償って社会に戻ってきても、行き場がない、仕事がない、そしてまた罪を犯してしまうという負の連鎖を断ち切るためにもまわりの人達や地域の人達の支えが大切なんだということが分かりました。

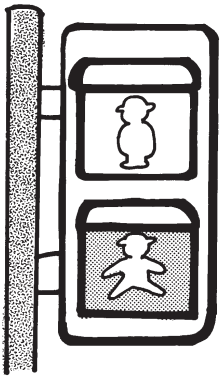
罪を償って戻ってきても、帰る場所がなかったら、おかえりと言ってくれる人がいなかったら、僕だったら立ち直れないかもしれません。そんな人達に、保護司さんは寄り添って、

「自分はどんなことがあってもあなたたちの側にたって考えるからね。」

と言うそうです。なんて温かい言葉でしょう。きっと保護司さんはそんな人達の心の支えです。

平成二十六年三月に「青少年意見募集事業」の調査がありました。その中に「あなたは、犯罪や非行をした人達の立ち直りのための活動に協力してもよいと思いますか」という質問があり、約五割の人が「どちらかといえば協力したくない」もしくは「協力したくない」と答えています。僕もこの活動を知らなかったら「協力したくない」にぐるぐる丸を書いて提出したことと思います。しかし保護司さんやＢＢＳ会の活動を知り、僕も大学生になったら、ＢＢＳ会の活動に参加したいと思いました。安心して住める場所がある、仕事がある、自分を待っていてくれる人がいる、おかえりと言ってくれる人がいるだけで、その人のためにもしっかりしないといけないというブレーキが出来ると思います。犯罪に手を出しそうになったら、頭に浮かぶ人がいるだけでいいのです。いつか僕も誰かのブレーキになれるような人になりたいと思いました。

「つまずいてもやり直せる社会」そんな明るい社会を僕も一緒につくっていきたいと思いました。



中学生の部

日本更生保護女性連盟会長賞（優秀賞）

許すこと、許されること

広島県私立近畿大学附属東広島中学校　二年

木内（きうち）　香緒（かお）

「本当に手、切れちゃったの？」

その時小学六年生だった私は初めて人に大きな怪我をさせてしまいました。裁ちばさみで遊んでいた時、誤って友達の手をはさみで切ってしまったのです。何が起こったのか分からず、私の目には、苦しそうに手の傷を押さえている彼の姿が映っているだけでした。

彼はすぐに病院に行きました。私は、

「人に怪我をさせてしまった。大変なことをしてしまった。どうしよう。」

と途方に暮れていました。

夕方、先生から私の親に連絡があり、両親と私で彼の家に謝りに行きました。彼の手の治療は無事に終わっていましたが、治るまでには時間がかかると聞きました。しかし、彼の両親は、私を責めることは一切なく、どうしてこんなことになったのかという理由を聞いてくれました。私の話にきちんと耳を傾けてくれ、わざとではないという私の言葉を信じ、許してくれました。

怪我をした友達も、いつもと同じように話しかけてくれ、クラスの友達も、友達に怪我をさせてしまった私と変わらない態度で接してくれまし

た。おかげで、私は少しずつ元気が出てきたし、学校に行きづらいという思いを抱くことはありませんでした。

友達に謝りに行った帰り道、母は私にこう言いました。

「彼のお父さん、お母さんはすごいね。自分の子どもに怪我をさせられたのに、あなたの話を聞いてくれ、許してくれるなんて、簡単にできることではないよ。謝りに行くのは当たり前のことだけど、謝りを受け入れるのは加害者の気持ちを軽くすることにもなるのだから、彼のお父さんお母さんに感謝しないとね。」

よくニュースなどで、

「わざとではない」

と耳にします。私はあの事件を起こしてしまった時、わざとではない、と家族に言い訳をしたくなりました。そんな私を許してくれた彼の両親と彼はとても優しく、強い人だと思います。私は「許される」ことで、深く反省し、救われ、「許す」ことができる人への偉大さを実感しました。

「許す」ことは、社会を明るくするためには大切なことだと思います。しかし、状況によっては、決して許されないこともあると思います。彼の両親も本当は私のことを絶対許せない気持ちがあったのではないかと思います。自分の子供に怪我をさせた人を許すなんて考えられなかったのではないでしょうか。

彼の両親はなぜ私を許してくれたのでしょうか……。わざとではなかったからなのか謝ったからなのか、泣いていたからなのか、心から彼に「ごめんなさい」と思ったからなのか。

私は、何もかもを許してはいけないと思います。もし許してしまえば、犯罪はどんどん増えてしまいます。それに、犯罪の被害者からすると、許すという気持ちになるのは簡単なことではありません。

法務省のホームページに「加害者が心から反省し、自立することが被害者にとって最大の償い」

というようなことが書かれていました。被害者やその家族の気持ちは本当にそうなのか、私には分かりません。ただ、加害者が再犯を犯すようなことがあれば、被害者は確実に悲しみます。だから、加害者が心から反省し、二度と犯罪をさせない環境を作ることは、少なからず被害者のためになると思います。もしかすると、頑張って生きていこうとする加害者の姿を見て、いつか被害者の心に雪解けが訪れる日が来るのかもしれません。「社会を明るくする運動」は、犯罪被害者を増やさないために重要な活動だと思いますが、被害者に「許してあげなよ」と働きかけるような風潮になるようなことがあってはいけないとも思います。

家族や友達、周りの人などに支えられ、心から反省し、生まれ変わるチャンスのある社会は、温かく、明るい社会だと思います。そして、その背景には苦しんでいる被害者がいることも絶対に忘れてはいけない、これもとても大切なことだと思います。

「二度と人に怪我をさせるようなことはしません。あの時、許してくださってありがとうございました。」

彼の家の前を通る度、私は心に誓うとともに、私も彼の両親のような「許せる心」を持てる人間になりたいと思うのです。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

「ぼくたちに出来ること」

山梨県甲府市立舞鶴小学校　六年　櫻井（さくらい）　翔英（しょうえい）

ぼくは、これまでに今日、明日が楽しく過ごせればいいと思って生きてきました。未来といっても、近い未来五年後十年後のことも、ぼんやりしか思い浮かべていませんでした。ですから、未来の社会がどうあってほしいのか、考えたこともありませんでした。そこで、今回この作文を書くことを決めて、初めてこれからぼくたちが生活していく未来の社会について考えてみることにしました。

現在日本では、毎日のように考えるとちょっと怖い犯罪、いじめが起こっています。今、ぼくたちの住んでいる地域では、このような事は起きてはいません。けれど、テレビ・新聞でニュースを見るたびに「なぜこのようなことをしてしまうのだろう。」と思い、悲しく、また怖く感じました。事件を起す人は、どのような思いをしているのだろうかと思い、もしかしたら寂しい思いや悲しい思いをしてしまったからなのかなと想像していました。でも、犯罪を犯した人が反省をして、また社会へ戻ってくるのは、正直怖い気持ちもありました。

ぼくの家の近くで『社会を明るくする運動』の

ポスターを見つけました。ポスターを貼った保護司の方にどのような活動をしているのかと教えていただきました。すると、犯罪や非行のない明るい社会のために立ち直ろうとする人の相談や生活のサポートをして、支え続けていることを知りました。ぼくだったら犯罪を過去に犯した人と関わることはちょっと怖いのではないかと思いました。しかし、犯罪を犯してしまった人も、二度と犯罪を起こさないようにサポートをすれば、地域も安全なものになるはずなので、その地域と社会のつながりを作ることが大切なのだと教えていただきました。普段なら、見落としてしまうポスターでしたが、保護司の方から資料をいただき、お話をお聞きできたことで、地域から安全な社会を作っていくことを知ることができました。

今回ぼくの住んでいる近所にも、ボランティアで社会のため活動をしている方がいらっしゃることを知り、たくさんの人たちが見守ってくれることで、明るい未来は作られていくのだと気がつきました。

今ぼくにできることは犯罪や非行のない健全な心をつくることだと思っています。ぼくは、剣道を習っています。剣道の先生は、いつも、ただ剣道が強くなればよいわけではない、剣道を通じてマナーを学び、感謝の気持ちを忘れないようにしていかなければいけないとお話ししてくださいます。ぼくは、できるだけ誰に対しても優しい気持ちをもつこと、いいこと悪いことの判断をしっかりつけること、常に感謝の気持ちをもって人に接することを気をつけています。

登下校時には、旗振りのお父さんやお母さん、見守り隊の地域の方々に、「おはよう。」「いってらっしゃい。」「おかえり。」「今日は暑かったね。」と声をかけていただきます。毎日の一言が、とてもうれしく感じます。ぼくは、必ず返事を返すようにしています。そうすると、不思議と笑顔になってしまいます。こうした言葉は、ぼくたちの心を温かく明るい気持ちにしてくれます。これまで

6年間毎日温かい言葉をいただいたお礼に、ぼくは学校では児童会副会長を行っています。この気持ちを、今度は下級生たちに伝えるために、学校のあいさつ運動に、ハイタッチあいさつ運動という活動を取り入れました。一日の始まるあいさつを、上級生と下級生とが手を合わせることで、元気にすることができます。帰りも学級の友だちや下級生たちと、元気にあいさつすることで、明日という未来につなげることができると考えました。

未来の社会については、まだまだ予想もつかないけれど、ぼくたちが毎日行っている活動は、明日という未来につながる第一歩だと今回考えることができました。また、安心、安全なまちづくりのために、今回関わっている方の存在を知り、これからぼくたち自身もっともっと地域の方々とつながっていくことが大切なのだと思いました。

小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

「想いのかけ橋」

広島県広島市立山本小学校　六年　森（もり）　ひなた

私にとって「社会を明るくする」というのは、犯罪や非行のない社会をつくるということだと思う。最近、ニュースで犯罪や非行の話題がよく取り上げられる。いつまでも続く犯罪や非行。小学生の私にも、犯罪や非行のない社会をつくるためにできることはないのだろうか。

私のクラスの担任の先生は、いつもノートにメッセージを書いてくれる。ノートを開くと、「今日、けがをしていたけど大じょうぶ？」「配り物を進んでしていたね」「無理しすぎないでね」といった温かい「言葉」が書かれている。ある時、ふと「自分には良い所がないのではないか」と不安になり、ノートに書いて質問してみた。すると、先生は「あなたはとてもがんばり屋でやさしいよ」と返してくれた。先生が自分のことをしっかりと見てくれていると思うと、なんだかうれしくて安心した。先生の「言葉」が私の自信になった。

その時、「言葉」は人を救えるのではないかと思った。「言葉」が相手に安心やうれしさ、自信を与えるのだと気付いた。

以前、裁判を傍聴したことがある。その事件は未成年の犯罪だった。犯人は複数いて、共同生活

を送っていた。その中の一人は、
「久しぶりに家に戻ったら、家族に『なんで帰ってきたの』って言われた。」
と仲間に話していたそうだ。私は、この人達は家にもどこにも居場所がなくて、どうせ自分のことなんてだれも見ていないんだと投げ出してしまい、同じ思いをした仲間と共に憎しみや怒りといった感情にふり回され、犯罪を犯してしまったのかもしれないと思った。では、そこに「言葉」があればどうなっていただろうか。「大じょうぶ?」「すごいね」「ありがとう」などの温かく優しい「言葉」を周りの人にかけてもらっていたら、きっと憎しみや怒りといった感情をコントロールして犯罪を犯さないことも可能だったかもしれない。居場所があると思えたかもしれない。

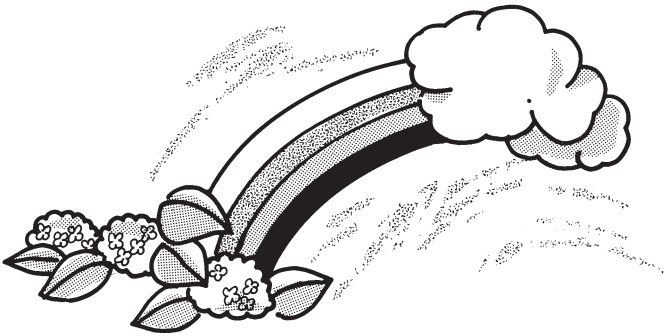
「言葉」は居場所をつくることができる。私はそう思う。居場所をつくってあげることで、犯罪や非行を防いだり犯罪を犯した人や非行に走ってしまった人達が気持ちを改めて私達と同じように過ごすための支えになったりできると思う。

しかし、逆に「言葉」が人を傷つけてしまうこともある。実際、「言葉」のいじめで命を落とした人もいる。「言葉」は、やさしい想いを伝えるかけ橋にもなれば人を傷つける凶器にもなる、すなわち薬にも毒にもなるのである。だからこそ、私は凶器として言葉を使うのではなく「あなたは独りじゃない。私は見ているよ。」とやさしい想いを伝えるかけ橋として使いたい。

「言葉」を大切にすること。それが、今の私にできることだと思う。直接、大きな社会を明るくすることにはつながらないかもしれないけれど、まずは自分のクラスの人や地域の方々としっかり「言葉」をかけ合い、クラスや学校、地域全体を明るくしていきたい。その活動が積み重なり、やがては大きな実を結び、社会全体を明るくすることにつながると信じている。

「言葉」一つで社会が変わる。日々、何気なく使っている「言葉」には、大きな力があるのかも

しれない。その「言葉」が、想いのかけ橋となってだれかを助けることにつながると思う。「言葉」を大切にしよう。だれもが幸せに過ごせる、そんな明るい社会を目指して。



小学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

地域のチカラ

大分県豊後大野市立三重第一小学校　六年　松尾（まつお）　清加（きよか）

毎日のニュースの中で、犯罪や非行について報道されない日はありません。その中で、私が一番恐ろしいと感じるのは、「ぎゃく待」と「ゆうかい」です。それは、何の罪もない子ども達が危険にさらされるのが許せないし、自分が同じ立場になったら…と、想像するだけで悲しくなるからです。特に「ゆうかい」については、母の友達の娘さんが小学三年生の時、下校途中に消えてしまった事件があり、身近に感じます。十数年間、娘さんの帰りを待ち続けているお母さんの苦しさ、悲しさを繰り返し母から聞いてきました。私は、その娘さんと自分を重ねて考えてしまいます。恐かっただろうな…、お母さん達に会いたいだろうな…。母は、こんな悲しく許せない事件は、二度とあってはならないのだと言います。では、どうすれば悲しくおそろしい事件を未然に防ぐことが出来るのでしょうか。そこで、私は、三つ考えました。

一つ目は、「あいさつ」のチカラです。私の小学校、地域では、退職された先生方や保護者の方が、毎朝、

「おはよう！気をつけて行ってらっしゃい。」と声をかけてくれます。元気なあいさつや優しい声

をかけてもらうと、とてもいい気持ちになり、一日分のがんばる力をもらえる気がします。反対に、あいさつをしてもぶっきらぼうな恐いあいさつが返ってきたり、時には、無視されることもあります。そんな日は、朝から少しいやな気分になります。帰ってから母に話すと、

「大人にも色々な人がいるけれど、清加は、自分がされてうれしいことを人に、自分がされていやなことを人にはしない、大人になりなさい。」

と言われました。私は、朝からいい気持ちにしてくれたあいさつを見習いたいと思います。世の中に気持ちのいいあいさつがあふれたら、みんな温かい気持ちになるはずです。

二つ目は、地域の人達との絆を深めることです。地域の人達との絆を深めることで、おたがいの顔や名前がわかり、見かけない人がいたら、警かいできます。私達の地区では、高れい者と子ども達が一緒に夏休みのラジオ体操をしたり、交流会をします。その時、子ども達の顔や名前を覚えてくれていて、見守ってくれているのだと感じました。

次に加害者のことを考えてみます。

例えば、未成年が、たばこをすっていれば、当然非行ですが、なぜ、非行に走ってしまうのでしょうか…。もしかすると、友達関係や家庭の事情などで、自分を見失ってしまうのかもしれません。そんな何かのきっかけから非行をくり返し、気づいたら、罪を犯してしまっていた…。そして、その人が罪をつぐなった後、心を入れ変え、やり直そうと努力しても、周りの人からは冷たい視線を向けられるばかりだとしたら…。その人はまた、悪の道に戻ってしまうかもしれません。そうして、犯罪や非行は、くり返されてしまうのではないでしょうか。

その悪の連さを止められるのは、「地域の人の支えと受け入れ」だと思います。地域の人達が受け入れてくれることによって、加害者にも新たな道が開けるのです。ひ害を未然に防ぐとともに、

加害者が立ち直れる環境づくりをしていくことが、犯罪や非行を減少させることにつながると思います。そして、ひ害者にも加害者にも、地域の人達の支えと協力がとても重要です。

私は今、十二歳。これからもたくさんの人と関わり合いながら大人になっていきます。

増々、人と人との関わりが希はくな社会になるかもしれません。だからこそ、犯罪のない安全な社会を作るため、私も将来、地域の大切なチカラの一部を担う一人になりたいと思います。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

僕を変えてくれたもの

福井県坂井市立三国中学校　二年　樋田（ひだ）　真優（まひろ）

小学生の時の僕は学校でケンカばかりしていた。もちろん、だれでもかまわずケンカしていたわけではない。嫌がらせをしてくるのはいつも同じ子達で、僕はそんな嫌がらせに我慢することがどうしてもできなかった。

僕は小さいころから自分の悪かったことを人にうまく伝えられなくて、言い合いになると負けることがよくあった。先生がケンカの原因を聞いてきてもうまく説明できなくて、ウソをついた相手の思うとおりになってしまうのも悔しかった。だから嫌がらせをされると、いつも手が出てしまった。僕がケガすることもあったけれど、相手にケガをさせることもあって、学校でケンカをすると、すぐに家に連絡がいって、僕が小学生の時はずっと問題扱いされていたと思う。

そんな僕は中学生になって変わった。町内五つの小学校の生徒二百九人が中学校に入学し、一つになった。そんな新しいクラスメートの中で、僕のことをばかにする子はいなかった。逆にとても仲良くしてくれる子がいて、初めて親友と呼べる子ができた。担任の先生も、部活の先生や先輩も、みんな僕に優しくしてくれて、小学校の時と比べ

て、ケンカをすることは全くなかった。自分の思ったことも少しずつ他の人にきちんと言えるようになった。みんなが急かさないでゆっくり聞いてくれたからだと思う。

小学生の時、スポーツは何もしていなかったから、中学生になって運動部に入るのは不安だったけれど、警察官に憧れていたので柔道部を選んだ。太っていた体は柔道できたえられて筋力に変わり、太っていると言われることもなくなった。

人と殴り合いのケンカをしてケガをさせることはいけないことだとわかっていたけれど、自分を抑えることが小学生の時はできなかった。そんな僕を変えてくれたのは中学校でできた友人や先生だった。もちろん自分でも中学生になったら今までとは違う自分になりたいと思っていた。だけど、小学校と同じ環境だったら、もしかしたら変われなかったかもしれない。僕は暗闇からやっと抜け出せて、初めて学校が楽しいと思えるようになった。大げさかもしれないけれど人生が変わった。

こんな体験をしたから、僕は犯罪や非行を犯してしまった人でも、自分を優しく受け入れてくれる仲間がいれば、きっと立ち直れると思っている。そしてその仲間には犯罪者というレッテルをはらずに接してほしい。

一度犯罪を犯すといい仕事には就けないとよく聞く。「あの人は犯罪者だ」という目で見られると、自分が変わりたいと思ってもなかなか変わることができない。海外のような誰も自分を知らない所で一からやり直すのは変われるチャンスかもしれない。だけど、言葉が分からないと優しく受け入れてくれることは分からないし、気づかないから変われないと思う。僕は警察官に憧れているけど、元犯罪者だってきっと、やりたいことがあるはずだから、できないと決めつけずに何にでも挑戦できるチャンスがもらえればいいと思う。さらに、怯えることなく安心できる場所ができれば、また犯罪を犯そうと思わなくなるのではないだろうか。

中学生の部

日本ＢＢＳ連盟会長賞（優秀賞）

支えたい

広島県広島市立戸山中学校　三年　橋本（はしもと）　萌（もえ）

私はある一冊の本を手に取った。今、若者に人気の作家山田悠介さんの「メモリーを消すまで」という本だ。この本にはとても魅力を感じた。私はこの本の背表紙を見て少し高かったけれど買ってしまった。この物語の主な内容は、犯罪防止のため、全国民の頭にメモリーチップを埋め込み犯罪を犯した人の犯罪の記憶（記録）をすべて消して更生を助ける。しかし、そのシステムに何か疑問を感じている一人の男が奮闘するというものだ。私はこの本を読んで驚いた。この本には犯罪を犯した人の更生の難しさが細かく書き記されていた。私はこの本を読むまで、事件が起こり苦しむのは被害者やその家族だけだと思っていた。でもこの本を読んで私の勝手な思い込みは間違いであると気が付いた。

私の妹は小学一年生の時交通事故にあった。その時私は小学四年生で、家で祖父と母と一緒に妹の帰りを待っていた。するとそこに一本の電話が鳴った。何も考えていなかった。ただの何の意味もない私にとってはどうでもいい電話だと思った。でも違った。その電話は、私と妹の通う小学校から妹が事故にあったという電話だった。その

ことを母から聞いた時私は頭が真っ白になった。そして気付いた時には、家を飛び出し道路をがむしゃらに走っていた。自然と泣いていたんだと思う。母と事故現場に着くと、たくさんの人だかりができていてその中心には血だらけの妹がいた。救急車が到着して、やじうまがみんないなくなった後、一人その場に残って必死な形相で電話している女性がいた。小学生の私でも、この女性が加害者だということは容易に想像できた。私は今にも溢れ出てきそうな涙をこらえて、まるで汚い物を見るような目で彼女を睨んだ。一生許さないと思った。でも「メモリーを消すまで」を読んで私は考え、そしてたくさん調べた。そして彼女にあんな態度をとった自分を恨んだ。彼女は別に妹を殺したくて交通事故を起こした訳ではない。彼女にも大切な家族がいて彼女のことを心配する人がいる。だれかが彼女のことを受け入れてあげないといけないと思った。

最近日本では少年による犯罪が増えている。少年（未成年者）は更生する可能性が高いので、成人同様の刑事処分を下すのではなくて原則として家庭裁判所により保護更生のための処置を下すことを規定とする少年法という法律があることを調べてみて初めて知った。少年法は二千年に改正され刑事処分の可能年齢が「十六歳以上から十四歳以上」となった。二千七年には少年院送致の対象年齢は「おおむね十二歳以上」となった。法務省は「おおむね」の幅を「一歳程度」としたため十一歳の者も少年院収容の可能性がある。これらのことはすべて初めて知ったことだった。現在国民投票法で十八歳以上を成人とみなす項目があることから少年法の年齢規定が二十歳から十八歳に引き下げようとされている。私はこの見直しに賛成だ。なぜなら国民投票法でもし、十八歳以上が成人とみなされ投票権が得られるようになったなら、もう立派な社会人として認められているということで善悪の区別がはっきりと自分でつけられるということだと思うからだ。でも、やはり少年

法など犯罪を犯してしまっても更生できる場所を作ってあげることはとても大事なことだと思う。犯罪を犯してしまった人を社会が受け入れるのにはとても時間がかかる。私は見守ってあげたいと思う。そして支えてあげたいと思う。少しでも早くその人が社会に復帰できるようにするためには何が必要なのかを考えた。やはり一番大事なのは受け入れる気持ち、支える心、優しい思いである。

最初の話にもどるが「メモリーを消すまで」のように罪を犯した記憶を全部消してしまえばいいかもしれない。しかし、記憶を消したところでその人が犯罪者だという事実は変わらない。それどころか周りの人がその人のことを冷たい目で見たり差別したりすると、更生どころか人を信じられなくなってしまうのではないか。私はこれから、更生しようとしている人を支えていきたいと思う。犯罪がなければそれにこしたことはない。でも犯罪を犯してしまい一生懸命更生しようとしている人を支えていける社会こそ明るい社会だと私は思う。

中学生の部

日本BBS連盟会長賞（優秀賞）

温かいご飯

長崎県大村市立西大村中学校　三年　久保（くぼ）　樹生（いつき）

学級にいると、ふと聞こえてくる、

「お母さんはうるさい。」

「親が面倒くさい。」

という言葉。聞く度に重たい気持ちになります。なぜなら僕は知っているからです。いつか後悔することを。僕も、かつては親に向かって「うるさい。」と言っていました。

僕が小学校3年生のある日、家に帰ると母がいませんでした。僕は父に

「お母さんは。」と聞くと、父は「もうお母さんは家に戻らないんだ。ごめん。」と言いました。

何が起こったかすぐには分からず、その場に立ちつくしたのを覚えています。

その次の日、家に帰って「ただいま。」と言っても、返事はありませんでした。僕はその時、母がいなくなった事を痛感しました。特に悲しかったのは、朝ご飯も昼ご飯も、夜ご飯も、温かいご飯ではなかったことです。パンや、買ってきた弁当が続いたある日、我慢できなくなって、

「温かいご飯が食べたい。お母さん帰ってきてよ。」

と言い、寝るまで泣きました。

そして、後悔しました。宿題をしなさいと母に言われた時、僕が「うるさい。」と言わなかったら、いつも僕のことを思ってくれた言葉に、「だまっててよ。」と言い返さなかったら、温かいご飯が今も待っていたのかもしれないと、何度も思いました。

母の大切さ、ありがたさに気づいた時にはもう家にいなくなった後でした。

どうしようもありません。しかし、まだ両親がいる人は、僕の周りにたくさんいます。そんな人に言いたいです。当たり前に側にいてくれる人に、側にいてくれるうちに感謝することはとても大事だと。

今、日本だけでなく、世界の国でも親を大切にしない子どもが増えてきているように思います。親にゲームを取り上げられた子どもが、親を殺害するという事件まで起きました。

なぜ、自分のために働いて、ご飯も食べさせてくれる親を、自らの手で傷つけ、殺害までするのか、僕には理解できません。

もう二度とこんな事件を起こさないために、僕ができることを考えてみました。まずは、日頃から感謝の気持ちを忘れないようにします。僕が辛かった時、周りの人にたくさん助けてもらいました。祖母には、家事を手伝ってもらい、伯母には忙しい父の代わりに世話をしてもらって、これまでやってきました。

助けてもらっていることへの感謝を、日頃から忘れないようにしたいと思います。

次に、考えているのは、助け合いの輪を広げていくことです。助けてもらった人には、必ず恩を返し、大変な思いをしている人には自分から声をかけることで、助け合いの輪を広げていこうと思います。これまでたくさんの人に助けられてきました。だから、これからは苦しんでいる人がいたら、僕が励まして僕に励まされた人がまた別の人を励ます、そうやって苦しむ人がいない社会を作っていきたいと思っています。

僕が一番に恩返しをしたいのは父です。毎日一生懸命仕事をして、僕が熱を出した時はつきっきりで看病してくれました。中学生になってからは弁当を作ってくれています。そして家に帰ると温かいご飯を作ってくれる父に、一生をかけて親孝行をしていきたいです。

温かいご飯が待つ家庭が多くなれば、悲しい事件も少なくなり、みんなが、周りに感謝して恩返しをしながら生きていけば、この世の中は明るく輝く、と僕は信じます。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

手をさしのべてあげられる社会

新潟県新潟市立沼垂小学校　六年　高野（たかの）　真実（まみ）

非行や犯罪から立ち直ることのできる、明るい社会を作ることはできるのでしょうか。私たちにできることは、あるのでしょうか。なにもなかったように非行や犯罪からはなれられるのでしょうか。でも私は、周りの人が手をさしのべることも大切だと思います。私は周りの人に救われたことがありました。

私は、学校で失敗をしてしまいました。私は先生にしかられました。しかられていた時に友達が見ていました。友達は、しかられている私をどう見ていたのだろうかと心配になりました。友達は、もう私と話をしてくれないかなと思うようになりました。もし、また私と友達が仲良くできても、先生や周りの人は私のことをどう思うのだろうと心配になりました。不安になって、自分がしたことを後かいしました。次の日に、学校に行くと友達が、

「おはよう。昨日、大丈夫だった？　なんか不安な顔してるけどなにも心配ないよ。」

「そうだよ。他のみんなだって気にしてないし大丈夫だよ。」

「したことは悪いことかもしれないけど、先生も

ちゃんと、分かってくれてるし、みんなだんだん忘れていくよ。」
「だから、別に昨日のことなんか気にしてないし、これからもずっと友達だよ。」
「元気出して！」
そんな友達の言葉が嬉しくて、嬉しくて、泣きそうになりました。私は、「ありがとう。もうあんな事しないよ。」
と言いました。先生もいつも通りのやさしいあいさつをしてくれました。すごくほっとしました。周りのみんなも気にしてくれて嬉しかったです。その後はいつも通り、みんなは私と話してくれました。
私は、みんながくれた言葉に救われました。みんながくれた、大丈夫、の言葉のおかげで今まで通りの生活にもどるきっかけを作れました。自分を信じてくれている、友達や先生を誇りに思いました。
非行や犯罪を犯してしまった人も同じではないでしょうか。どのようにふるまえれば良いのだろう、どのように周りと接すればよいのだろうと困っているのではないのでしょうか。そんなとき、周りのだれかが
「大丈夫？」
などと、勇気がでる言葉をかけてあげたら、今まで通りに過ごす勇気がでるのではないでしょうか。きっと、私と同じで勇気をもらえると思います。私たちができることは、とても小さなことですが、明るい社会を作っていこうとする気持ちは大きなものだと思います。私は、非行や犯罪を犯した人が、社会にもどる社会の仕事も大切だと思います。けれども、私たちは非行や犯罪を犯した人達を助ける、「周りの人」だから、救う言葉をかけて、勇気をあげるのです。私は、「明るい社会」には、非行や犯罪を犯した人に、信じているから大丈夫、と手をさしのべてあげられる、そんな周りの人が大切だと思います。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

地域と防犯～つながりの大切さ～

兵庫県神戸市立名谷小学校　六年　寺岡（てらおか）　里紗（りさ）

今年になって、私の住む町に防犯カメラが五カ所、設置されました。帰宅時間や一人になった時間をねらって声をかけるなど、最近は新聞やテレビでもたくさんの事件が報道されています。「より安全な町にするために自治会の人たちで相談し設置が決まったのよ。」と母から聞きました。より安全な町にするために、みんなで考えて実行に移すなんてすごいなあと思いました。私は自分の住む町と防犯について考えてみることにしました。

確かに防犯カメラがついたことで、そこを歩いている時に前より安心と感じる時もあります。防犯カメラはそこの場所での犯罪をおさえる効果があると思います。でも「防犯カメラがあるからしない。」と場所によって変えているのなら、本当の意味で犯罪を防いでいることにはなりません。それに、もし事件が起き、その解明のために防犯カメラの映像を使うことになってしまったら、防犯カメラは役立つのかもしれませんが、防犯の意味と変わってしまいます。だから防犯カメラなどの機械は効果的ですが、防犯に大切なのは人と人とのつながりやコミュニケーションではないかと

思います。

祖父のことが頭にうかびました。同じ町に住む祖父は八十一歳です。私たち小学生のために、登校時の見守りボランティアとして交差点に十年近く立ってくれています。長い道のりを歩き、交差点に立つ祖父が見えるとほっとします。そう感じるのは私の祖父だからではありません。暑い日も大雨の日も私たちより先に行って立ってくれているという安心感からくるのだと思います。「おっちゃん」とか「りさのじいちゃん」とか「今何時ですか?」とか聞こえるときがあります。その子たちも祖父に安心感を持っているのだと思います。

ある日、祖父と私がいっしょにでかけていました。前からお化しょうも服そうも髪型や少し派手なかんじのする若い女の人が歩いてきました。すると、すれちがう時、「こんにちは。」とおたがい笑顔であいさつを交わしました。びっくりしました。最初の印象とちがって、女の人の笑顔がとてもすてきでした。私が「知り合い?」と尋ねると、祖父は「りさの小学校の先輩やで。あの子も交差点を通って学校行ってたで。」と教えてくれました。その人もきっと小学生の時、私と同じような気持ちだったのではないでしょうか。だから大人になっても祖父のことを覚えていたのだと思います。人と人とのつながりがすてきに感じて心が温かくなりました。

地域で行われる夏祭りのことも思い出しました。この夏、私はいつもと一味ちがうお菓子つりを体験をしました。例年、近所のお母さんたちが開いてくれるお菓子つりのお店にお客さんとして行き、楽しむだけでしたが、今年はお菓子をつめるお手伝いをさせてもらいました。袋づめ作業は予想以上に時間もかかり大いそがしでしたが、達成感がありました。今までは「夏祭り楽しい!」と喜ぶだけでしたが、目に見えないところでいっぱい支えてもらっていることに気づきました。夏祭りをきっかけに、地域の人たちが私たちのため

にいろんな活動をしてくださっていることに気づき、感謝することができました。

地域の人たちに大切に守られているおかげで私たちは安心して成長していくことができます。また大人同士で話し合ったり、協力しているすがたを見ると私たちもそんな大人になりたいと思います。このように人と人とのつながりを大切にしている地域はきっと犯罪も防ぐことができると信じています。私は気持ち良いあいさつをしたり、地域の活動に参加するなど、子どもでも地域に住む一人として人とのつながりを大切にしたいと思います。

小学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

やさしさは、わたしから

山口県光市立岩田小学校　一年　古木（ふるき）　智子（ともこ）

わたしには、こうこうせいのおにいちゃんがいます。わたしは、おにいちゃんのことが、だいっきらいです。さいきんは、はなすとすぐにけんかになります。そのときは、とてもいやなきもちになって、もっとやさしいおにいちゃんだったらなあとおもいます。どうして、わたしにだけやさしくないんだろう。

きのうもわたしが

「おにいちゃん、おりてきて。」

と二かいにいるおにいちゃんをよぶと

「うるさい。だまっちょけ。」

といいました。そんないいかたをしなくてもいいのにとはらがたって、おかあさんにほうこくをしました。

おにいちゃんが二かいからおりてきました。そして、わたしがおかあさんにいったことにおこって

「おまえは、おれよりもべんきょうができん。」

といいました。わたしは、いまそんなことはかんけいないのに。いみがわかんないとこころのなかでおもいました。それをきいていたおかあさんが

「ともは、かしこいよ。だいじょうぶよ。」

といいました。わたしは、おかあさんは、おにいちゃんのことをおこるとおもっていたのにおこらずにわたしにやさしいこえをかけてくれました。わたしは、おにいちゃんがいったことばでは、なみだはでなかったのに、おかあさんのことばでなみだがポロポロでてきて、ないてしまいました。

そのあと、なぜかおかあさんは、おにいちゃんにも

「いつもありがとう」

といいました。おにいちゃんはなにもいいませんでした。でも、そのあと、おにいちゃんはだまったまま、わたしにもひどいことはいいませんでした。

わたしは、すこしたっておにいちゃんに

「ごめんね。」

といいました。

わたしは、ひごろからおにいちゃんに

「バカみずき。」

とかいろいろとおにいちゃんがいやなきもちになることばをいったり、いやがることをしたりしていたから、わたしにやさしくしてくれなくなったんだとおもいました。だから、わたしが、やさしいことばをいったり、おにいちゃんがいやがることをしなかったりしたら、おにいちゃんもやさしいきもちになってくるとおもいます。

かぞくだから、ついつい、いいすぎることがあるけど、やっぱりわたしはほかのやさしくしてくれるおにいちゃんじゃなくて、なんでもいえる、わたしのおにいちゃんがいいです。もっとやさしいおにいちゃんになってもらうために、わたしからやさしいことばをいっぱいいいたいです。

わたしがおにいちゃんのことをすきをおもっていたらおにいちゃんにもつたわるとおもいます。まずは、わたしがかわります。

中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

犯罪をなくすために

宮城県多賀城市立多賀城中学校　一年　畠山（はたけやま）　宗（そう）

私は、この夏休み中に「犯罪はどうして起きるのだろうか。」ということを真剣に考えさせられる出来事に直面しました。それは自宅の近所をランニングしていた時のことです。コンビニエンスストアの前を通りかかると、高校生くらいの若い男女数人が警察官を相手に、大声で乱暴な言葉を発していました。何かを注意され、それに対して激しく反抗しているようでした。こわさから急いでその場を離れようと思いましたが、「こらぁ」という大声に反応し、思わず若い男女の方に目を向けてしまいました。次のしゅん間、体が震えるほどショックでした。大声を発していたのは、東日本大震災前に近所の公園で優しく野球を教えてくれたお兄さんだったのです。

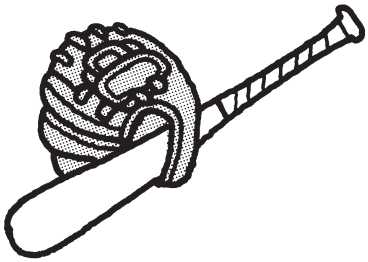
その後、ニュースを見ているときにふと気付いたのですが、「誰かが傷つけられた。」と聞いたとき、今までは「傷つけられた人がかわいそう。」と思うばかりでしたが、あの出来事に直面してからは、「どうして傷つけてしまったのだろう。」と加害者のことを考えるようになりました。なかなか答えは見つからず、出てくるのは「ストレス」という言葉ばかりでした。そのような中、家族と

車で出かけ、信号待ちをしていた時のことです。後ろからバイクが近づいてくると、赤信号を無視して爆音を鳴らしながら走り去って行きました。その時、父が「危険な少年の主張だな。」と小さな声でつぶやきました。私はすぐに「今のが少年の主張ってどういうこと。」と聞きました。その話がきっかけになり、私は家族にあの出来事に直面したこと、ニュースを見ている時にふと気付いたことを話しました。車の中だけでは話が終わらず、自宅に帰ってからもしばらくこの話が続きました。

家族と話した内容を整理すると、まず、近所の公園で野球を教えてくれたお兄さんは、東日本大震災でお母さんを亡くしていて、ずっとさびしい思いをしていたのではないかということ。次に父が言った「少年の主張」とは、自分の思いや存在を認めてもらえず、自分を見てほしいという気持ちをバイクでの危険な走行により表していたのではないかということ。そして、人を傷つけてしまったりするということは、おさえきれない不満やストレスにより自分を見失ってしまい、その不満やストレスを他人にぶつけてしまうのではないかということです。犯罪をなくすためにはどうすれば良いかについても話し合いましたが、犯罪を起こしてしまいそうな人に必要なのは、冷静に考えることと少しがまんすること。そして、犯罪を無くしたいと思っている人に必要なのは、人の悩みや不満を聞いてあげるなど、良き相談相手になることではないかと考えました。しかしながら、多くの人の不満や悩みを聞き、相談相手になることは不可能なので、一人一人が家族や友人のことを理解し、何でも気軽に話し合うことができれば、犯罪は少なくなるのではないかと思います。

もう少しで夏休みが終わりますが、新学期からは友人の話を真剣に聞き、何かいつもと違うと感じ時などは「どうかした？何かあったの？」と聞いてみたいと思います。また、自分が困ったり悩んだりした時は、自分の中だけで考えこまずに家

族や友人に相談したいと思います。人の話を聞くのも自分のことを話すのも勇気がいることだと思いますが、そのことが大きくなってしまう前に話し合えれば、皆が笑顔で「良かったね。」と言い合えるのではないかと思います。今後、夏休みに直面したあの出来事のお兄さんに出会い、もしも話す機会があったら「あの時は、野球を教えてくれてありがとうございました。また野球を教えてください。」と言ってみたいと思います。きっと、あの時と同じ優しい笑顔でキャッチボールをしてくれるのではないかと思います。



中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

明るい社会とは何か

兵庫県高砂市立松陽中学校　二年　萬山（まんやま）　花音（かのん）

私の考える明るい社会は、犯罪や非行をする人間がいないことではなく、犯罪や非行の原因がなくなることでできるものです。

連日ニュースでよく見る悲しい事件の数々は、不運な事故でない限り、まわりの人が救うことのできた命と心の数々です。そういった事件には必ず加害者と被害者がいます。そして被害者のことを大切に思っている家族や友達がいます。これだけたくさんの人を巻きこんでしまう犯罪や非行はなぜ起こってしまうのでしょうか。私は加害者も事件に巻きこまれた被害者のひとりと考えます。それは、その人自身がもともとから悪いということは絶対ないと思うからです。

私は幸せなことに、身近で犯罪が起こったことがないのでささいな姉弟げんかを例にとりたいと思います。

ある時、私の机に入れていた定規セットがなくなりました。家族の誰に聞いても知らない、と言われ、仕方なく授業は友達に借りたものを使わなければなりませんでした。後に、それは弟のしわざだったことが判明します。私は勝手に机から持ち出したことと、一度聞いたときに言わなかった

ことの二つに激しく怒り弟を責めました。

この場合、大げさではありますが、私が被害者で弟が加害者になります。もちろん、この話だけを聞くと弟が一方的に悪いことになると思います。でも、よくよく話を聞けば、勝手に持ち出した日、私はそこにいなかったそうです。そしてなぜ、一度聞いたとき正直に言わなかったのかと言うと、以前に同じことがありちゃんと言って謝ったのに怒られたそうです。その時の私があまりにも怖く、言い出せなかったらしいのです。これは私の方にも原因があるといえるんじゃないでしょうか。この世の中の全ての事件は、こんな平和なものではありません。しかし、どんな犯罪を、非行を、犯してしまったにせよ、何か理由があるはずです。被害者の方は、そんなことを聞いてられる場合じゃないと思います。そしてそんなことは警察の人が一生懸命調べてくれています。その通りです。私が言いたいのは、犯罪や非行をなくそうとするのなら、その原因の根っこの根っこを国民全員で消していこうということです。

「ストレスがたまっていた。」

「誰でも良かった。」

こんな風に取り調べで言う犯罪者を減らすのにはどうしたらいいのでしょうか。周りにいる一人一人を尊重する気持ちを、これまた一人一人が持つことです。例えば、朝家を出て近所の方に会ったら笑顔であいさつをしましょう、とかです。地域の輪が広がれば、その中で犯罪が起きることはほとんどなくなるはずです。

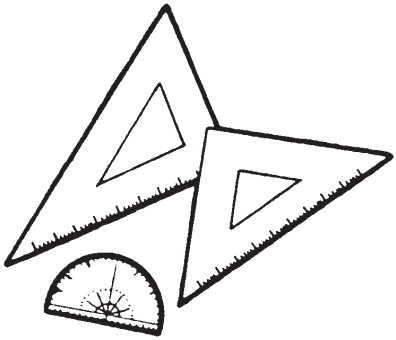
「お金が欲しかった。」

「つい万引きしてしまった。」

こんな風に取り調べで言う非行少年または少女を減らすのにはどうしたらいいのでしょうか。周りの大人が働くことの楽しさと、万引きをすることでどれほど大変な思いをお店の方がされるのかを教えてあげることです。そして、そんな関係をつくるのが地域でのかかわり、ふれあいの場です。

私は、社会を明るくするために自分たちででき

る運動というのは、人とのつながりを持つことだと思います。人とのつながりさえあれば犯罪、非行を踏み止まる勇気になるかもしれないからです。そして、踏み止まることのできなかった人も罪さえ償えば地域の、社会の一員として居場所ができ、立ち直りへの第一歩となるからです。犯罪や非行は、「自分にはもう居場所なんてないんだ。」と思ってしまった人が起こします。そんな悲しいことを考える人がいない世の中を、私は、本当の明るい社会であると考えます。



中学生の部

日本更生保護協会理事長賞（優秀賞）

温かい心に触れることで

福岡県福岡市立和白丘中学校　一年　後藤（ごとう）　駆（かける）

最近、テレビなどで、まだ成人にもならない僕と同じくらいの歳の若い人達が犯罪に手を染めるといったようなニュースをよく聞く。そのことが発展し、大きな事件にもなっている。なぜ、若いのにそんなことをしてしまうのだろうか。何が原因なのか。僕は疑問に思った。

そんな時、ある一つのテレビ番組を見た。内容は、学生の時に、親がおらず非行に走っていた男性が、非行をした人の立ち直りを支える活動をしているおばあさんに出会い、そのおばあさんと、自分と同じような状態にある人達と一緒に暮らす様子である。暮らしていく中で男性は、手料理などのまるで自分のお母さんのような、おばあさんの温かい心に触れ、成長していく。

この話の中で、僕が特に印象に残った場面がある。それは、誕生日の時に、おばあさんに手作りのバースデイケーキを作ってもらい、本当にうれしそうに笑顔で写る男性の写真が出る場面である。親がおらず、きっと手作りのバースデイケーキを食べたことが一度もなかったのだろう。初めて食べる手作りのバースデイケーキは格別なものだったに違いない。まさに、おばあさんの温かい

心に触れた、そう感じさせる笑顔であった。
　こうして、温かい心に触れ成長した男性は、就職をすることができた。そんな男性は、おばあさんについて、
「あのおばあさんに本当に助けられました。おばあさんのおかげで今があります。」と感謝していた。本当にすごいおばあさんだと僕も思う。非行をした人を立ち直らせる方法をよく知っていると思った。
　非行をした人を立ち直らせる方法、それは「温かい心に触れること」だと思う。非行に走る多くの人は勉強することができなかったり、家族がいなかったりという環境でもあると思うが、なにより「温かい心に触れること」ができない環境であると思う。しかし、おばあさんの家のように「温かい心に触れること」ができた人は、男性のような非行をした人でも立ち直ることができる。さらに、「温かい心に触れること」ができる環境を地域全体でつくることができれば、非行のない地域づくりができる。そのためには、地域や近所の人がそういう環境をつくっていく必要がある。僕自身、実際に近所の人の温かい心に触れた時がある。
　近所のおばさんが小学校を卒業する時、
「お祝いにプリンかゼリーかどちらがいい。」
と聞かれ、
「じゃあ、プリンがいいです。」
と言ったら、次の日に特大のプリンを持って来てくださったことがあった。
　また、僕の家のとなりに住んでいる九十代のおばあさんは、母の帰りが遅かった時に電話で、
「家に残り物があるから、家までちょっと取りに来て。」
と言われ、家に行くと、天ぷらや赤飯等を沢山くださったこともあった。
　そのおばあさんは、いつも僕が出かける時に、
「おはよう。」
とあいさつしてくださり、

「今日は暑いね。」
とか、
「今日は学校があるの。」
等、声をかけてくださる。そういった時に、温かい心に触れた気がする。
　温かい心は、別に人にあげる物だけに限ったことではない。日常生活の中にでもあるのだ。「温かい心に触れること」ができた人は、人に対して温かい心で接することができ、その心に触れることができた人は、人に対して、温かい心で接することができると思う。この温かい心の連鎖こそ、非行をなくしていけることであり、大きな事件を防げることである。僕はそう考える。

更生保護法人　立川更生保護財団について

立川更生保護財団は、犯罪や非行をした人たちの改善更生を図るため活動されている民間ボランティアの方々が、困難な状況の中で、地道に更生保護活動に取り組む姿に深く感銘を受けた立川ブラインド工業株式会社創業者立川孟美氏が昭和六三年一〇月に設立し、以来、更生保護事業を一層推進してきました。

財団としては、犯罪のない明るい社会の実現のため、次のような事業を行っています。

一　更生保護施設に対する助成

犯罪や非行をした人たちの社会復帰に尽力している更生保護施設に対して、施設の改善や整備の充実のための助成事業を行っています。更生保護施設への助成を通じて、犯罪や非行をした人の立ち直りを支援しています。

二　〝社会を明るくする運動〟～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～への協力

本運動では犯罪や非行のない地域社会の実現のため、全国各地で様々な取組が行われています。財団としても、本作文コンテスト作文集の制作をはじめ、様々な取組に協力をしています。

三　保護司活動への協力

犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支えている民間ボランティアである保護司は地域社会で保護観察や〝社会を明るくする運動〟をはじめとした犯罪予防活動などに取り組んでいます。財団としては、保護司の行う地域活動や学校との連携活動に対して支援を行っています。

財団としては、今後も犯罪や非行をした人の立ち直りを支援している方々への協力・応援を通じて、「犯罪のない明るい社会の実現」に向けて、積極的に事業を展開していきます。

第66回“社会を明るくする運動”
～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～
作文コンテストのお知らせ

第66回“社会を明るくする運動”作文コンテストは次のとおり、実施いたします。多くの学校でこの作文コンテストに取り組み、たくさんの応募をしていただきますよう、御協力お願いします。

なお、作文コンテストの詳細については、次ページの最寄りの保護観察所（各都府県の県庁所在地と、北海道では札幌、函館、旭川、釧路）にお問い合わせください。

○主催

法務省
“社会を明るくする運動”中央推進委員会

○後援（予定）

全国連合小学校長会／全日本中学校長会／全国小学校国語教育研究会／
全日本中学校国語教育研究協議会／公益社団法人日本ＰＴＡ全国協議会／
更生保護法人全国保護司連盟／日本更生保護女性連盟／日本ＢＢＳ連盟／
更生保護法人日本更生保護協会

○応募規定

（１）資格

全国の小学生及び中学生

（２）テーマ

“社会を明るくする運動”の趣旨を踏まえ、日常の家庭生活、学校生活の中で体験したことを基に、**犯罪・非行のない地域社会づくりや犯罪・非行をした人の立ち直りについて**考えたこと、感じたことなどを題材としたものとします。

（３）原稿の枚数

400字詰め原稿用紙３～５枚程度

（４）応募先及び応募締切日

応募先：“社会を明るくする運動”都道府県推進委員会（事務局：保護観察所）
締切り：平成28年９月ころ（締切日は各都道府県推進委員会によって異なります。詳しくは、最寄りの保護観察所へお問い合わせ下さい。）

（５）その他

応募作品は、他の作文コンテスト等への応募作品又は応募予定作品を除く自作・未発表のものに限り、原則として原本（手書きのもの）とします。応募に当たっては、題名、学校名、学年、氏名を明記してください。

○選考

“社会を明るくする運動”各地区推進委員会及び同各都道府県推進委員会によって選考し、同中央推進委員会に推薦された作品から、中央推進委員会において審査し、入賞作品を決定します。

○表彰（予定）

- 最優秀賞：法務大臣賞……小学生・中学生各１点
- 優　秀　賞：全国連合小学校長会会長賞……小学生３点
  全日本中学校長会会長賞……中学生３点
  全国保護司連盟理事長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護女性連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本ＢＢＳ連盟会長賞……小学生・中学生各３点
  日本更生保護協会理事長賞……小学生・中学生各３点

お問い合わせ先 “社会を明るくする運動”都道府県推進委員会事務局

推進委員会	事務局(保護観察所)	郵便番号	住　　所	電話番号
札幌地区	札幌保護観察所	060-0042	北海道札幌市中央区大通西12丁目	011-261-9225
道南地区	函館保護観察所	040-8550	北海道函館市新川町25-18	0138-26-0431
旭川地区	旭川保護観察所	070-0901	北海道旭川市花咲町4丁目	0166-51-9376
道東地区	釧路保護観察所	085-8535	北海道釧路市幸町10-3	0154-23-3200
青森県	青森保護観察所	030-0861	青森県青森市長島1-3-25	017-776-6419
岩手県	盛岡保護観察所	020-0023	岩手県盛岡市内丸8-20	019-624-3395
宮城県	仙台保護観察所	980-0812	宮城県仙台市青葉区片平1-3-1	022-221-1451
秋田県	秋田保護観察所	010-0951	秋田県秋田市山王7-1-2	018-862-3903
山形県	山形保護観察所	990-0046	山形県山形市大手町1-32	023-631-2277
福島県	福島保護観察所	960-8017	福島県福島市狐塚17	024-534-2246
茨城県	水戸保護観察所	310-0061	茨城県水戸市北見町1-1	029-221-3942
栃木県	宇都宮保護観察所	320-0036	栃木県宇都宮市小幡2-1-11	028-621-2391
群馬県	前橋保護観察所	371-0026	群馬県前橋市大手町3-2-1	027-237-5010
埼玉県	さいたま保護観察所	330-0063	埼玉県さいたま市浦和区高砂3-16-58	048-861-8287
千葉県	千葉保護観察所	260-8513	千葉県千葉市中央区中央港1-11-3	043-204-7791
東京都	東京保護観察所	100-0013	東京都千代田区霞が関1-1-1	03-3597-0120
神奈川県	横浜保護観察所	231-0001	神奈川県横浜市中区新港1-6-2	045-201-3006
新潟県	新潟保護観察所	951-8104	新潟県新潟市中央区西大畑町5191	025-222-1531
山梨県	甲府保護観察所	400-0032	山梨県甲府市中央1-11-8	055-235-7144
長野県	長野保護観察所	380-0846	長野県長野市旭町1108	026-234-1993
静岡県	静岡保護観察所	420-0853	静岡県静岡市葵区追手町9-45	054-253-0191
富山県	富山保護観察所	939-8202	富山県富山市西田地方町2-9-16	076-421-5620
石川県	金沢保護観察所	920-0024	石川県金沢市西念3-4-1	076-261-0058
福井県	福井保護観察所	910-0019	福井県福井市春山1-1-54	0776-22-2858
岐阜県	岐阜保護観察所	500-8812	岐阜県岐阜市美江寺町2-7-2	058-265-2651
愛知県	名古屋保護観察所	460-8524	愛知県名古屋市中区三の丸4-3-1	052-951-2949
三重県	津保護観察所	514-0032	三重県津市中央3-12	059-227-6671
滋賀県	大津保護観察所	520-0044	滋賀県大津市京町3-1-1	077-524-6683
京都府	京都保護観察所	602-0032	京都府京都市上京区烏丸通今出川上る岡松町255	075-441-5141
大阪府	大阪保護観察所	540-0008	大阪府大阪市中央区大手前4-1-76	06-6949-6240
兵庫県	神戸保護観察所	650-0016	兵庫県神戸市中央区橘通1-4-1	078-351-4004
奈良県	奈良保護観察所	630-8213	奈良県奈良市登大路町1-1	0742-23-4869
和歌山県	和歌山保護観察所	640-8143	和歌山県和歌山市二番丁2	073-436-2501
鳥取県	鳥取保護観察所	680-0842	鳥取県鳥取市吉方109	0857-22-3518
島根県	松江保護観察所	690-0841	島根県松江市向島町134-10	0852-21-3767
岡山県	岡山保護観察所	700-0807	岡山県岡山市北区南方1-8-1	086-224-5661
広島県	広島保護観察所	730-0012	広島県広島市中区上八丁堀2-31	082-221-4495
山口県	山口保護観察所	753-0088	山口県山口市中河原町6-16	083-922-1337
徳島県	徳島保護観察所	770-0851	徳島県徳島市徳島町城内6-6	088-622-4359
香川県	高松保護観察所	760-0033	香川県高松市丸の内1-1	087-822-5445
愛媛県	松山保護観察所	790-0001	愛媛県松山市一番町4-4-1	089-941-9983
高知県	高知保護観察所	780-0850	高知県高知市丸ノ内1-4-1	088-873-5118
福岡県	福岡保護観察所	810-0073	福岡県福岡市中央区舞鶴1-4-13	092-761-6736
佐賀県	佐賀保護観察所	840-0041	佐賀県佐賀市城内2-10-20	0952-24-4291
長崎県	長崎保護観察所	850-0033	長崎県長崎市万才町8-16	095-822-5175
熊本県	熊本保護観察所	862-0971	熊本県熊本市中央区大江3-1-53	096-366-8080
大分県	大分保護観察所	870-8523	大分県大分市荷揚町7-5	097-532-2053
宮崎県	宮崎保護観察所	880-0802	宮崎県宮崎市別府町1番1号	0985-24-4345
鹿児島県	鹿児島保護観察所	892-0816	鹿児島県鹿児島市山下町13-10	099-226-1556
沖縄県	那覇保護観察所	900-0022	沖縄県那覇市樋川1-15-15	098-853-2945

第65回“社会を明るくする運動”作文コンテスト入賞作文集

発　行　更生保護法人　立川更生保護財団
編　集　“社会を明るくする運動”中央推進委員会事務局
製　作　株式会社　双文社

※本作文集の作品を転載する場合は、法務省保護局更生保護振興課に御連絡ください。

平成28年4月発行

人はみな、
生かされて
生きてゆく。
更生保護ネットワーク